修行者の許へ佛事にそへて申し遣しける　正之

本歌
君ならでたれかはなめむ法味をばあまいもすいもしる人ぞしる

圓融院の御時慈恵僧正内にまゐり給ひ女に五つの障の經文いとたふとく談じたまふ折から御簾の内より或女房の申出されけるうた　僧正慈恵

有漏地よりむろぢに通ふ釋迦だにも羅睺羅が母は有りとこそきけ

返し

いなやいなむきても見べき毬栗のえめば一度落ちもこそせめ

西をあとざまになして小用せられけるをある人の見て彌陀を念ずる行者の西方をけがせるはいかにぞやといへればよめる　安養尼

此尼が西方けがす科あらばめし捕りたまへ彌陀の御國に

蜆子繪によめる　澤庵和尚

いかばかり蝦をとり喰ふ報あらば終には老の腰やかがまん

聖德太子胎内より持出で給ふ御舍利を二歳の春手の内より出させたまふ折しもわざとならず鐘七つつきぬ其音雙調なりとなれば他國のむかしも思ひ合されてよめる　和泉式部

南無佛の御舍利を出す七つ鐘むかしもさぞな今も雙調

父母の子を思ふに越えて佛は衆生を哀れみたまへど其御教にたがふ人のみなるをおもひてよめる　讀人しらず

父はうち母はいだきてにげぬるを誠の杖と子やおもふらん

尼ヶ崎にて說法の時俄に雨降出たり荒れたる寺

にて只漏りにもりければ聽衆のものどもさわぐを見てよめる　權大僧都日與

とくとその昔も今もふる雨のもりやは法のさまたげぞかし

末法になりて衆僧の信うすきをおもひてよめる　澤庵和尚

我法の花のいろはのちりぬるをなげくに袖のゐひもせず京

題しらず　讀人しらず

下手の鞠今の禪宗のなまざとりありとはいへどあたらざり鳧

千佛の出世ありともすくはじや我と妄業このむ人の身　道元和尚

發心して程なく破戒なるを見て　源爲仲卿

髪それど直ならぬ氣はなまなりな道心邪とや人のいふらん

題しらず　僧正公助

あはれなり袈裟衣のみかどやきてまつくらやみの僧の心は　雲居和尚

今人の因果菩提を信ぜぬは破戒の比丘の仕業なりけり

惡比丘の其身のとがはさて置きぬ人の道心やぶるうらめし

焔王の神通天眼しらずして檀那たらせる僧の愚かさ　行風

十惡の歌の中に綺語

輕薄の詞に花を咲かせつゝとれるこがねは何まいすぞや

同じ中に惡口

いきしちにひみゐりいとて理をも非にいひなすや只口のしれもの

五戒の歌の中に殺生

戒は只貝がらになし破りつゝ躬をとりくらふ僧よ僧かは

同じ中に邪婬

色好む僧は佛の戒法をかへり法界悋氣とや見る　知度

本歌
寺すてふ我名はぱつと立ちにけり大黒はようかくし置きしが

同じ中に酤酒　行風

酒盛し手がはぢかみとなるならばそれをねぶりて飲まんすきもの

大圓鏡智のこゝろを

むさし鐙さすがにかけて現世から後世をもたのむ馬頭觀音

雪の降る日引導せられし時鍬の先ぬけゝるによ

める　一休和尚

三界のくはぬけはてゝ今こそは淨土の道にゆきぞかゝれる

題しらず　法然上人

口にある南無阿みだぶの味ひを自力の人は喰ひしらぬなり

佛道にたゞ投げ入れておけ寶彌陀の淨土をかね倉にして　願信法師

名にしおはゞ救はせ給へあみだ佛生死の海にしづむ石龜　道明

たのもしな雜喉妄想をもらさずもすくふあみだの誓ひある世は　未得

押並べて釋迦の鑓の手つかひなばつるぎの山のせめや遁れん

六十三歳にて終りをとる時よめる　休甫

我齡とはゞ七九の鐘木杖かねは持たでも南無阿彌陀佛

薦僧　みとく

祖師の名のふけといふより尺八の竹のよをつぐ今の薦僧

題しらず　勝可

くうに有りてくうて見られぬ望月のその味ひを誰にとはまし
　　蓮生法師

發心の日より行住座臥西向きてのみありけり或
時東へ下るとて道につかれうまにのるにうしろ
ざまにのりながら詠める
　　葦葉

浄土にも剛の者とや沙汰すらん西にむかひてうしろ見せねば
題しらず
　　一圓

西方を目當にずゝのたま〳〵も念佛は樂のたねがしまなり
　　三哲

あひづかや佛を見るとらうそくのたちまちはるゝ業障の闇
平等性智の心を
　　智元

朝夕のお寺まゐりのはり小袖のりのちからも有難くなる

一心の水にかなけのある人はあみだぶだぶとあくたれてとれ
　　平時頼朝臣

此世にて米のすこしも持ちたきはうゐたる人と修行者のため
佛法修行を疊によせて
　　讀人しらず

慈悲おもく道の中籠智惠のへり和歌のうらごも才覺の糸
疊師の後世いかにしてか助かり侍るべきと問ひ
　　權大僧都光宥

ける返しに
念佛をさしては申しおかずとも功たゝみなば西へ行くべき
紺搔に佛道修しえたるありとき聞きて或人行きて
事の理を尋ねければ返事に
　　讀人しらず

板を鐘へらを撞木にとりなしてかたのごとくにのり教へまし
釋教魚といふことを
　　長好

佛にはまだなまなりの魚の鮨菩薩界までおしかゝりたや　入安

百首歌の中に釋教

いもが子に限りしもせじ汁のみをしやくしと成りて救ひあげばや　讀人しらず

題しらず

畫像にも木像にもよく祈る身は病難死苦の遁れやはある　道元和尚

伊呂波歌の中に

拈花をば八萬人にしめせども迦葉ひとりぞ破顏微笑す

佛祖師經律論をからずして直に覺るを禪僧といふ

はげまして自己の佛を悟らずば六道輪廻たれか遁れむ

努力して今わがぬしを覺らずば奈落の苦をばたれか救はん

えり嫌ふ二心ある人の身のなすことは皆地獄てんどう

虎頭虎尾收むる時の勢ひは金剛力もおよばざりけり

手をあぐも足をのぶるも自由にて見聞覺知するは是たそ

二と一の中間底に有る物の名字を何とつけて呼ぶべき

肉身をかへず佛になることは只我家の座禪なりけり

十方の佛ほさつとわけ置くも皆唯識の所用なりけり

不去不來有無善惡にとゞまらぬ人を自在の佛とは言ふ　貞清親王

題しらず

寒さうなりしんごん[1]の行者かなこぼれる水もあびらうんけん

寛永の頃聖護院道晁法親王入峯の時よめる　源重秀朝臣

本歌

山中はとても籠にはのられじと宮もわらぢをはきて峯入　行風

人峯をよみはべりし

峯入や或は野に臥す山臥の難行苦行やせこけの行　源俊治

笈頭巾かけ出し三十六度まで峯に入るもぞ二世の願行　讀人しらず

後の世の爲とおもはゞ慈悲心になさけをかけて他を利益せよ　雲居和尚

本來は無心無相の眞佛も五欲にひかれ凡夫とぞなる

戒たもち座禪念佛つとめても心あしきは造地獄業

何事も前世の業といふ人の菩提つとめぬ是ぞなほ愚痴

苦も樂も現世のことは一刹那迷へば未來流轉永劫

貴賤智愚僧俗男女別なれば菩提の修行分に應ぜよ

一念の慈悲眞實の種となりて九品の蓮華ひらきこそせめ　夢窓國師

寺を建て堂をたてたる功德よりたゞ常づねの慈悲や增しなん

藥草喩品の心を　淨久

自然降る雨を千百無量なるきゞにうくるやおのが分際

修行門の心を　行風

三毒に醉うてぶくめく病には釋迦の金言妙藥のよし

七世父母　道元和尚

七世すぎ其父母をたづぬればあなたは若く我は老いたり

題しらず　方救

世に人の南無阿彌陀佛の口眞似を似せても似ぬは眞實の心

角あれば物のかゝりてむづかしや心よこゝろまろ〳〵とせよ　平時頼朝臣

返し

おのづから角一つあれ人ごころあまり丸きはころび安きに　隆覺禪師

生ひては必ず死ぬる習ひとしつても知らぬや富
るは色にふけり酒宴遊興にてあたら月日を暮し
貧しきは朝夕むざとむさぼるのみならば來世と
やらんにてたとひ兵庫のものといふとも彼閻魔
王殿が御免あるまじきをおもへと童部の方へ遣
し侍りし　　行風

後の世も知らでうつかりへうたんとなりさがるべき身を顧みよ
妙觀察智の心をよめる　　道元和尚

圓からず又方ならず長短も五色にもなき我こゝろかな
題しらず　　理西

極樂の金座敷は尻ひえん只行くべきは地獄釜底
道寛

戀路よりまつすぐに入る涅槃こそ實に煩惱は卽菩提なれ
雲居和尚

儒釋道みつのをしへの別ならず善に善報惡に惡はう
名利是非貧富生死を忘れなば僧俗ともに卽心卽佛
妙にして神あるものは心かな天地にわたり微塵にも入る
變化所執の理を　　澤庵和尚

一心に念に起せばさまぐに變化のすがたうくるなりけり
題しらず　　弘法大師

我胸にふる盜人を持ちながら菩提の種に心ゆるすな
胎藏界の心を　　行風

我胸に法の智水をたゝへなば瞋恚の炎もえもあがらじ
經　　讀人しらず

經といふ其字に五時の糸はへており出す布は四教八教

佛心宗の寺にて菓子を出してこれに狂歌とある　智元

ときを

出來たるこのみのもとを觀ずればしやうじ離れし柘榴つぶ哉　良恕法親王

煩惱卽菩提生死卽涅槃の心を

煩なうの體も菩提の證據には澁柿を見よあまほしとなる　平時頼朝臣

有空不二の心を

ありのみとなしといふ名は變れどもくふに二つの味ひはなし　讀人しらず

題しらず

山里の折かけ垣のからす瓜うむとはすれどくふ人もなし　讀人しらず

初發心時便成正覺といふ經文の心を

須彌山に腰打ちかけて一天を笠にきれども耳は隱れず

白骨名號を書きて其讃に　曉阿上人

人間のをはりを見れば白骨の肉をはなるゝ南無阿彌陀佛

婆子燒庵の意如何といふ句の心を　夢窓國師

婆婆でこそ男女の差別あれ骨となりては變らざりけり　道元和尚

卽心卽佛の心を

一心の門開くれば法界の草木國土ほとけなりけり

利劍にて皆截りつくしみる時は萬象森羅古佛なりけり

自づから求めず捨てずさし置かず自由自在はおのが三昧

本來意をよめる　夢窓國師

山賤が白木の合子そのまゝにうるし附けねばはげ色もなし

弘法大師入定の年經て後或僧高野に詣でて御廟

のわたりにてよめる歌

空海は虚空の定をいさしらで心せまくも穴へいるかな

かゝりければ大師にや有りけん香衣の僧忽然と出できましての返し

空海は虚空の定に入るものを心せまくも穴と見るかな　一休和尚

水鑑の中に毒薬反して薬となれば罪の重きはかへりて佛とやならんと書きてよめる

作り置く罪の須彌程あるなれば閻魔の帳につけ所なし

鎌倉追罰の勅を請けて出でたゝれける時餞別に詠みて遣しける　夢窓國師

餞別に何をがなとはおもへども本來空の一物もなし

返し　源尊氏

一物もなきをたまはる心こそ本來くうの法味なりけれ

題しらず　讀人しらず

我戀は障子のひきて嶺の松火灯袋にうぐひすの聲　道元和尚

湊にはけさ鉢袋猫の皮花のさかりに大太刀の鞘　一休和尚

達磨の繪に

悟りぬるきやつめが身とて何かあるへんてつもなき豁骨かな

水鏡の中に

うそをつき地獄に落つるものならばなきこと作る釋迦いかゞせん

おのれさへあつけ拂はぬ不動めが惡魔降伏無用なりけり　讀人しらず

題しらず

尺八の聲のあるじを尋ぬれば地水火風の四大なりけり　夢窓國師

西向にせなかをくふと觀ずれば東しらみに夜は明けにけり　讀人しらず

あら樂や虛空を家と住みなして心にかゝる造作もなし　一休和尚

たそにたそたそ〳〵にたそたそにたそたそにたそとて何も無き哉　比丘一糸

眼れる布袋の畫の讃に

手を伸べてゆるりとぬるか布袋どの袋のうちに何もなければ　弘法大師

題しらず

今ははや後世の勤めもせざりけり阿吽の二字のあるに任せて　一休和尚

水鑑の中に

萬法をみる人ごとの喉かわき思はで水を一口にのむ

なき跡のしるしに石がなるならば五輪の代に茶臼きれかし

いろは歌の中に　道元和尚

明々と三五夜半の一月をあまねくわかつ千江の水

本來意を問ふとてよみて遣し侍りける　智藍法師

直なるもゆがめる川も川は川佛も堂も同じ木のきれ

返し　一休和尚

直なるもゆがめる川も川は川佛も下駄も同じ木のきれ

題しらず　讀人しらず

座禪する衾の下のやせ虱くふと思ふも障りなりけり　雲居和尚

物毎に執著せざる心こそ無相無念の無住なりけれ　藤原光廣卿

達磨の畫讃に

西來意我だにしらぬ達磨殿ましして他人に問ふは僻こと

いろはの歌の中に
十ぶんにいたりて見れば何もなし佛といひて疵を附けけり　道元法師

題しらず
得道は有りけるものを隣なる祖父がさげた火打袋に　智元

萬法一心の心を
一乘も二乘も同じのり汁の齋と非時との替りばかりよ　澤庵和尚

有佛法有世法といふ謠の詞を題にてよめる
佛法と世法は人の身と心一つかけてもたゝぬ物なり　一休和尚

借用の地水火風返辨申今月今日といふ前書にて
よめるうた
かりおきし五つの物を四つかへし本來空に今ぞおもむく　空也上人

念佛は野にも山にも申しおけ犬も鼠も喰はぬものなり　弘重

聞えてはにんにく慈悲の理に目に橡ほどな涙こぼるゝ　貞因

隨喜功德品の心を
法華經と鳴く鶯のこゑ迄も耳の功德に聞くぞたふとき　宣相

題しらず
浮世ぞと思ひきつたる尺八を吹きならすこそ生佛なれ　智元

極樂にくふほどあれば他の物をむさぼらぬこそ生佛なれ　法然上人

有がたや障りのおほき女人をば彌陀ひとりこそ助けましませ　蓮如上人

南無といふそのふた文字に花咲きてあみだ佛とみはなりにけり　澤庵和尚

布袋畫の讃に

この袋あけて見たれば何もなし何もないこそ何もありけれ　雲居和尚

常不輕品の心をよめる

比丘はたゞ萬事はいらず常不輕菩薩の行ぞ殊勝ならまし

題しらず

西方の本來空に往生し無量壽佛とならん目出度き　三哲

無我の心をよめる

我といふそのえせものを捨てよこそ釋迦と阿彌陀の跡もつぐなれ

題しらず

苦を樂に爲替へよとて釋迦によろり世に出で給ふ事ぞうれしき　行風

持戒

六欲のあかを拂へと釋迦無二の五かいはうこそ忝なけれ

三寶

一心に二世を思はゞ三寶の四種を受け得て五欲忘れよ　讀人しらず

法界體性智の心を

父母にかりてぞきたる皮衣破れて後はもとの塊

空は貌月日はまなこ風は息山野海川我身なりけり

作者之目錄

聖德太子一首

親王

伏見殿中務卿邦房親王一首
青蓮院殿尊朝法親王一首
青蓮院殿尊純法親王一首
八條殿式部卿智仁親王一首
妙法院殿常胤法親王一首
伏見殿兵部卿貞清親王三首
曼珠院殿良恕法親王一首

執柄

近衛殿前關白左大臣信尋公二首

公卿

庭田殿權大納言正二位源朝臣重保一首
烏丸殿權大納言正二位藤原朝臣光廣九首
中山殿權大納言正二位藤原朝臣親綱一首
飛鳥井殿權大納言正二位藤原朝臣雅章一首

山科殿大納言藤原朝臣言總一首
京極權中納言藤原朝臣定家二首
東坊城殿權中納言菅原朝臣盛長一首
六條殿參議源朝臣有純一首

非參議

唐橋殿正二位菅原在通一首
庭田殿正二位權中納言源朝臣重通一首
土佐一條殿權中納言藤原朝臣兼定一首
水無瀨殿中納言藤原朝臣氏成一首
五辻殿左兵衛佐正三位源爲仲一首

雲客

庭田殿中將源重秀朝臣二首
同中將源純朝臣三首
薄殿左衛門佐從五位橘諸光一首
竹內殿源俊治一首
富小路殿中務大丞從五位秀直一首

武家

太閤秀吉公一首
安土內大臣信長公二首
安藝中納言大江輝元一首
仙臺中納言藤原政宗一首
贈太政大臣尊氏公一首
長府參議大江秀元一首

小倉参議源忠興一首　宇和島少將藤原秀宗一首
肥後侍從從四位源光尚一首　姫路從四位源忠次一首

地下

猿丸太夫一首　淡路守宗增三十五首
内藤氏右衛尉藤原武員一首　櫻井氏中務丞基佐一首
小濱氏民部少輔嘉隆十二首　梶原氏平次左衛門尉景高一首

女房

伊勢二首　和泉式部一首
宮川尼一首　大阪如風尼一首

僧官

細河二位法印玄旨十五首　德善院印法玄以一首
法眼紹巴一首　朝倉宗順法師一首

越前左衛門督藤原義景一首
鎌倉正五位相摸守平時賴五首
南部氏遠江守源經行一首
小堀氏遠江守一政二首
安養尼一首
和州夏虫妻一首
東山長嘯子四首
牡丹花二首

蜷川宗祇法師一首　智藴法師一首　天滿森法橋由己三首

僧天台宗

前大僧正慈圓二首　前大僧正尊應一首　僧正慈惠一首
權大僧都心敬一首　定法寺僧正公助一首　西行上人四首
曉月四首

眞言宗

弘法大師三首　高野山權大僧都賴慶一首　高野山權大僧都光宥二首
同山木食應其上人一首

念佛行者

空也上人一首　遊行曉阿上人一首

佛心宗

天龍開山夢窓國師六首　建長開山隆覺大禪師一首　永平開山道元和尚二十一首

松島開山
法心上人一首　一休和尚十一首　澤菴和尚八首
雲居和尚十七首　雄長老三十二首　永原寺比丘一糸一首
寒山寺瑞南和尚一首

淨土宗

法然上人三首　天性寺白譽上人一首　蓮生法師一首
法藏院願信法師一首　楞嚴寺正愚法師一首　遠里下野弘誓法師一首

本願寺

蓮如上人一首

當法華宗

日蓮上人一首　權大僧都日與一首　敦賀日能上人一首

山城京并所々

本因坊順阿一首　算砂一首　藪内氏理西二首　元理一首

福安一首　長好一首
北村氏季吟二首　松江氏重賴三首
祇園住春丸一首　賀茂住僧南歌二首
八幡山瀧本坊昭乘一首　同上寶成坊信海廿四首

大和

法隆寺歌慶二首　箸尾住不動院賴智五首
箸尾住中川氏正之一首　片岡住松村氏定行二首
下田村住僧葦葉一首

河内

壺井住僧元安八首　通法寺長尊一首
壺井住鹽野氏義綱二首　同岸野氏唯正二首
弓削住吉村氏種好二首　松原住小野氏宜齋一首

松永氏貞德五十二首　安原氏貞室四首
永明一首　泉齋一首
伏見住栗田氏玄康十七首　淀住佐川田氏昌俊一首
山崎宗鑑一首　土山氏元行一首
同所地藏院光知二首　同所井上氏勝可二首
長樂住伊藤氏夏虫二首　田原本住西井氏行好一首

白木住柴田氏古生一首　春日住田中氏弘重七首
柏原住三田氏淨久八首　弓削住眞壁氏三政二首
同所同氏由貞一首　同暮松氏高壽一首

連歌師 宗訊一首
玉手氏 貞直一首
正法寺 成安三首

和泉堺
同上 宗珀一首
良 忠一首
岩井氏 正長三首

御菓子所 山城掾貞因四首
淨久寺 一圃十首

攝州大阪井所々
宇野氏 淨治七首
桑山氏 道僖一首
掾ヶ庵 言當三首

道仲一首
澤田氏 玄貞一首
樹木氏 宣相三首
白江氏 白云一首
梶山氏 保友廿四首

平山氏 方救三首
杉本氏 玄室一首
二 笑二首
富永氏 燕石一首

千氏 宗易一首
少 隣一首
大津住高橋氏 爲盛一首

黃檗會下 道明八首
三宅氏 獨友一首
赤池氏 三哲六首
松山氏 玖也一首
加納氏 智元六首
伊勢村氏 次良一首
大津 如貞一首

松井氏 宗吟一首
岩井氏 教二六首

大善寺 智短一首
戸齋 休甫八首
自影庵 正繼二首
若林氏 昌長一首
玖也 道寛二首
塚口 安明二首
松江氏 近吉十一首

齋藤氏 滿永廿首
井上氏 宗恒十三首
井上氏 宗鋪四首
長瀨氏 常林二首
長濱氏 昌治一首
蕗氏 忠昌一首
氏家氏 忠精三首
立田氏 行榮一首
正 直一首
上下氏 知度二首
難波住 不白一首
同川崎坊 空存一首

伊勢村氏 重安一首
平山氏 雅珍三首
深江氏 伊貞二首
嶋 久清四十一首
富田氏 正信八首
利 清二首
立田氏 行景二首
朝倉氏 行順一首
野間氏 行安十七首
川副氏 親之一首
福嶋氏 春清一首
同所 實久一首

同上 正定七首
同上 直之一首
中堀氏 初知一首
友 以二首
角田氏 路春三首
中嶋氏 正好二首
同上 正景一首
高屋氏 春房四首
河内氏 利忠二首
吉田氏 一賴一首
又 太夫一首
天王寺住 以春一首

西川氏 重故三首
松井氏 重宣一首
同上 器音八首
政 之一首
吉田氏 恒貞二首
一 根一首
生白庵 行風四十三首
正木氏 可正一首
八尾氏 宗俊一首
前村氏 休和一首
天滿住西山氏 宗因一首
住吉住僧 可悅一首

尼崎住僧白曲二首　池田住松井氏宗舟一首

參州　井上氏旨治一首

相州　小田原岩手氏宗也七首

武州江戸住芳賀氏治住一首　德元十首

未得六十三首

下總　椎名氏安繼一首

江州海津庄小荒路住龍泉住來馮八首

播州姫路住岡氏一幸五首　幸田氏正舍一首

防州　正成七首

長州萩住　牟井氏卜養七首　高嶋氏玄札一首

鹽田氏友知三首　山本氏是急二首

紀州　宗朋八首

住所不知　入安卅二首

讀人不知　八十八首

鹿島御歌一首

右內出所古書目錄

舊事本紀一首　伊勢家集二首　山家集一首

盛衰記一首　山門百首二首　東鑑一首

沙石集一首　法華直談七首　撰擇直談二首

法然五十首教化歌二首　道元伊呂波歌十九首　夢窓法語歌九首

最明寺百首五首　一休水鑑五首　信長記二首

餌指問答一首　雄長老百首廿六首　入安百首卅二首

由己百首三首　太閤記八首　澤庵謠詞題歌二首
竹齋雙紙三首　宗增兩度百首廿三首　同源氏卷題歌十二首
前狂歌集卅四首　仁勢物語十二首　雲居往生要歌十七首
貞德百首二十首　鷹築波集一首　玄康百首十七首
京童雙紙一首　未得吾吟集六十四首　獨笑雙紙一首
黑谷上人傳一首
已上三十四部
惣歌數千五十餘首
作者數二百四十一人

此外鹿島明神御詠有

春秋の移りかはるは世の常ながら、はからず大内山の花をよそに見なし、ふりぬる高津宮の月にむかひても、昔をしのぶ心もなく、いたづらにいく年々をか送りむかへし。かゝるを里のわらはにもよほされて、此度夷曲の品をわかち侍るに、猶和歌をも書集めよとなれど、難波津安積山のふた歌をさへ心ひとつにさだめやらで、人のさかしおろかなるをいかが言はんといひはなつにもやまず、しひて望めれば、心ざしをむなしうせじとて、やつがれが綴りしをこれかれ書きのべ侍り。なか〳〵いはし商人のよききぬ著たるたぐひとも、千鳥の鶴の毛衣かと、我さへかたはらいたき物から、やんごとなきおほんかた、ことには道の長者なりし前内府通村公など、和歌なりと感じ仰せけるにぞまかせ侍る。抑歌のさまいひしれるとにはあらずとのみ。

承應乙未元日

年月をかぞふるに冬の日春にこえ春また冬にたてる事いくそとせなり今日たつ春のみさらぬにすべらぎの世をしろしめしての春も今日ぞ始めなるをおもひてよみはべりし

世に匂ふ日影もしるし天地のさらにひらくる花の春かな

金龍寺にて花のちるをみてよみ侍りし

入相の鐘よりさきもちりぬめり花やあだなる世をいさむらん

瞿麥

かぞいろをとふ人あらば朝夕の露と答へよなでしこの花

八月十五夜

星合のつらき別れを更におもふ月の今夜の明け方の空

大和に侍りし頃としの暮に雪の降りければよみ

はべりし

榊葉に雪のしらゆふかく山の神代おぼゆる年の暮かな

旅行

朝なゆふな露になれ行く武藏野の秋のはてしや霜の下くさ

戀歌のなかに

住吉のまつとはすれどあふ事の遠里をのが身を恨みても

寄露無常

風渡る草葉にやどす露の身の消えずはありとも幾程の世ぞ

維摩經に須彌入芥子中といふ文の心を

露のぼる稻葉の末に色とめて秋は田面の月のゆふ暮

元祿五年壬申正月吉日

高津汚道士
生白庵行風

古今夷曲集 終

とくわかにまんざいしふとは、きみもさかえてます〳〵ごきげん、あいきやうありけるあらたまの、としとるはじめにふでとりて、李少君がたまの句々をかうべにのせ、あやんがたちをはくやのきしんがかたなの腰折れにいたるまで、ゆづりはをくちにあぢはひ、五えふのまつを手にもちろん、よろづのたからかに、世にきこえたるくさ〴〵の、言のはかきあつめずといふ事なし。一本のはしらは一花ひらけ、二本のはしらは二月、三月三本の柱はさんぶくのなつ、四本のはしらは新秋の天、五本のはしらは梧桐のつゆ、六本のはしらはむつのはな、七本の柱はなごりををしみ、八本のはしらはやま川をこえ、九本のはしらは九相をかなしみ、十本の柱は十かへりをいはひ、十一本十二本の柱は十一十二のふたつもじ、うしのつのもじごするもじ、十三本十四本の柱は十三なゝつなにごとによらず、十四まろ〳〵とりぐ〳〵のうた、十五本の柱は三五の十八短歌の句々、旋頭をり句廻文の歌、十六本の柱はいさよふ花の月を觀じ、十七本のはしらはたちまち神祇の道となれり。あはせて七百あまりの歌、十七の卷柱、かの三神のまもり神、えいやつとおつたてたれば、

雨がふれどもかみくちず、風が吹いてもふきちらず、日はてるともほしみせにいでず、むしはくふとも反古にならず。かく舌づつみうちをはりぬれば、これからそろ〳〵まちやらこの、この〳〵するにもよみつたへ、かたりつたへ、あそこここゝからきゝてがまゐるは、かひてがまゐるは、まゐるは〳〵、まゐらざらめやも。さくらあめあきらかなる寶引の、なはもひとふたみつのとし、はるのはじめのうらゝかなる、四方赤良しるす。

たはれ歌はちはやぶる神代よりはじまるにもあらず、ひとつとや人の代よりはじまるとしもあらず、ほと〳〵手まりうたにひとしく、ひいふう三河まざいの口つきにかよひて、はらのかはより〳〵に口すさび、かみのつるをり〳〵にいひいだせるなり。そも〳〵このみち、大目にみろく十年よりして、まちやらこのまてしばしもなくぞひろまりける。しかりしよりこのかた、あまたのすき人、みそひともじのみそ吸物にちよつと獨活めの口がしこく、これみやぎ野のはぎのはし、あれ三輪山の杉のはし、一本のはしを二本にひきさき、三本四本とかぞへたつれば、かの柱の數よりもしげしといへども、いへ〳〵にのこれる集のみにして、世の中のうたあまねくえらべるたぐひはあらざりけらし。されば八すみのえびすぐうともいはず、いさめのつどみどんともいはぬ、かしこき御代にあひて、なにかなにはの行風とかいふが、古今夷曲、後撰夷曲の二つの集をえらぶ。こゝに四方のあからなん、行風があとをしたふとにはあらねど、花見に幕をはるのあした、月見に障子はあきのゆふべ、折にふれたる出傍題を、みづからのも人のをも、物のはしにかいつけおけるを、

何がしつねに、歡樂となく哀情となく、かたちとかげとの如くものせしかば、こゝにもかしこにも見きゝせしうたども、いにしへ今の差別なく、かの宇治大なごんの物がたり書い給ひしにひとしう、筆架にふでをおかざりければ、いつしか歌は七もゝちにぞあまれりける。さはいへ世に落書とかいふたぐひの歌は、ひたすらはぶきてこの集にのせず。げにやつきせぬはまのまさご、そのはま川にすなどりすなる、あみのめでたうさぶらひけるとて、萬載きやうかしふとなづく。これ江戸まへのひらめのほし、いくよの霜をかさねざらめや。天明みつのとしはるの日の、なが〳〵とえらび終れるになんありける。

朱樂菅江

萬載狂歌集　卷第一

春歌上

春たちける日よめる　貞德

さほ姫のすそ吹き返しやはらかなけしきをそゝと見する春風

あけら菅江

さほ姫のわらひかけつゝ山のはをあらはす方に春や立つらん

はるのはじめに　四方赤良

くれ竹の世の人なみに松たてゝやぶれ障子を春は來にけり

寅のとし春のはじめに　へつゝ東作

東風吹かば今年も首をふる法師はりこのとらの春を迎へて

年のはじめ百人一首によせて人々歌よみけるなかに　から衣橘洲

まづひらくいせの太輔がはつ暦けふ九重も花のお江戸も　臍穴主

年のはじめに

今朝ははやひらく扇の天地金ひかりもきよき年玉の春　讀人しらず

ひめはじめ

ひめはじめ暦家の説は何なりとすべて女の所作をいふなり

此うた延寶三年のいせごよみに見えたり

芝浦早春

海の景よいとや申す春駒の齒にまたたらぬわが芝の浦　濱邊黑人

船松飾

風の追手入來る舟をまつかざりうらしろぐと春の曙　川井物梁

波の上も子の日の野邊ににたり舟ひかばやともに小松しめなは　へつゝ東作

臣は水君もろともに御座船の湊に風をまつかざりせり　小鍋のみそうづ

聲々に御代はめでたの松かざりうたふからろの神送り船　藪中椿

鍛冶初夢

ことしより拍子なほらん天からのめぐみをえたる鍛冶が初夢　隣鶴

扇賣

春に今朝あふぎ〳〵とよびこみて松と竹との枝かはしませ　奥政

みづから畫ける羽子のこのうへに

さかさまにうてばのほれどすむ空にたまりもあへず落つるこきの子　細井翁

小むすめのはねつくを見て　四方赤良

はごの子のひとこにふたこ見わたせばよめ御にいつかならん娘子

草菴むすびけるとし萬歳のことぶきけるを聞き

て　もとのもくあみ

萬歳にほめたてられてはづかしき草のいほりの柱數かな

海邊萬歳　浦邊干網

萬歳がうたふことばも眞砂にてつきぬや君がとくわかの浦

鳥追　石部金吉

さみせんのあいにほういの一聲はいづくの誰を呼子とり追

歌合の中に霞　布留田造　和州郡山　池田正式

はげ山もかすみそめぬる春の日にきんかあたまは猶ぞかがやく

子日　四方赤良

子の日する野邊に小松の大臣は今も賢者のためしにぞ引く　あけら菅江

けふはまた引手あまたの姫小松たれとねの日の春ののべ紙　紀定丸

鶯

鶯も聲はるの日の長しゆすにほうほけ經をくり返し鳴く

餌すり鉢はらふ鶯ひと聲をわれらが耳へはやくおまはし

百首歌の中に若菜　雄長老

うりに來る程をしとへばわがそのの鶯菜とてねこそ高けれ

七種の日爪をとるとて　松屋てつ女

ぬきすつる袋たびらこ芹なづなけふこそ野邊につめやとらなん

春のはじめ水口の宿を過ぎけるとき風はなのふりければ　讀人しらず

春寒きゆきはいやぢやとみな口ににくがる風の花ぞうち散る

この歌ある人のいはく正女がなり

百首歌の中に殘雪　如竹

かた岡や草はもえぎの小紋にて地白にのこる雪のむらぎえ

梅　藤本由己

春雨はお先へふれさやり梅を折りてもちやり匂ひかき鑓

百首歌の中に　猶影

さきがけの花は大きな鑓梅の枝に葉むしやはおくればせなる

歌合の中に　布留田造

紅梅と名によばれぬるおはしたのほゝ先にこそかはしられけれ

隣梅　へつゝ東作

枝ひくき隣の梅は板屏のあなうつくしとのぞきこそすれ

山家梅　もとの木あみ

わびずみはとりちらかしておく山になげやり梅の枝のをり垣

山手白人のもとへまゐりけるに常陸より移し侍りし梅のよく根つきたるよしを聞きて　へつゝ東作

常陸より根こじて植ゑし梅なればよくつくば山はやましげ山

返し　山手白人

梅のうたこのもかのもと思ふまにはやよみ出す當座とう作

ある人のもとに梅の花見にまかりけるがうなぎを手づからやきて酒すゝめければ　あけら菅江

目の前で手づからさくやこのはなに匂ふうなぎの梅がかばやき

六十四歳の春梅の花を見て　杵菴

我年も八々六十四方の春さかり久しき梅花心易

花がめにいけたる梅椿を　卜養
やり梅をこだちのつばきうけとめて花の命は生きてこそみれ

柳　栗梢

寶引の繩ならなくに春風をすつとこせいといなす青柳　志月菴素庭

黑髪のみだれ柳も春の日は眉をつくりてさてもゆつたり　もとの木あみ

けづりかけの柳

春ながくけづりかけたる青柳をみどりにせんとはらふうなる子　星屋光次

奴紙鳶

奴だこやりもちの木の方よりもきれて落ちたる二合半坂　もとの木あみ

廿日正月

よりあひてこそり〳〵と寶引をひくや鼠の廿日正月

野遊

田樂の木の芽に腹もはるの野や霞の帶をゆるめてぞくふ　紀のたらんど

吸ひつけるきせるはたれとしらぬ火のつくしがりする春の野遊び　石部金吉

春の野にあそぶよめ菜や小娘の後からはしりつくしたんぽゝ　鬼窟採瘤

若草

のどけしな富士の高根の煙よりすそ野一ぱいもゆる若草　藤本由己

士筆

こまぐ〳〵とかきわけゆけば春の野に夏毛の筆のつくぐしみゆ　猶賴

百首歌の中に早蕨

やがてまた人の手にこそなはれなんおのがこぶしを出す早蕨

きさらぎのはじめ雪ふりける日豆腐にやまのい
もすりかけたるをくひ侍るとて　あけら菅江

山かげにつもる豆腐の淡雪も春のものとて腹にたまらず
初午近

はつ午はむつきのうちにやゝちかしもはや幟のぼりのちをつけて見ん
初午のうたよみ得ざりければ　浦邊干網

初午の歌の出來ぬは何のばちたゝく太鼓のおのがどんから
西行忌　鹿津部眞顔

みな月の雪にはあらできさらぎのもちにきえたる富士見西行
三保女

うま〳〵と世をのがれけりきさらぎのもちにかけたる佐藤憲清さとうのりきよ
春頭巾　かべの中塗

はる風にもはや頭巾もいらぬ比はなのあたりをよきてふくめん

萬載狂歌集　卷第二

春歌下

花

見た所瓜をふたつにさくら花ようにはの雪峯のしら雲　から衣橘洲

しら雲かなにぞと人のとふならばこたへてわらへ花のくちびる　漁産

嵐こそあいさうなけれちる花の跡にぎやかすみねのしら雲　未得

化物百首歌の中に

花の雲天狗櫻とあらはれて空からどつと笑ふ山かぜ　物事明輔

百首歌の中に櫻

花よりも葛團子をや思ふらん吉野の奥にあさる山賤　もとのもくあみ

櫻

いく本もさくやうなぎのかばざくら匂ふはなにはたれもこがるゝ　二朱判吉兵衛

春の日江戸見坂にて

八重一重みごとにさいた櫻田はまことに花の江戸見坂かな　長義

奉公人見花

御屋敷の奉公人はいとまあれや飛鳥の花にけふもくらしつ　燕子

奥家老ひらきなほりて花の供幕より外へ女中ちらさず　から衣橘洲

卜者見花

見る花にまづ雨風のけはなしとさすや春日のうら〳〵や算　坡柳

花のもとに樽を枕にねたる人を見て

木の本の鼾に花やちらすらん樽を枕の春の夢介　四方赤良

吉原花

吉原の夜見せをはるの夕ぐれは入相の鐘に花やさくらん　もとの木あみ

中の町鹽がまざくらうつし植ゑてそばをとほるの大臣もあり　ちゑの内子

御殿山にて

御殿山高麗芝の青だたみ花のふすまをひく霞かな　四方赤良

惜花

咲く花のかへる根付の琥珀にもなりて木かげの塵をすはばや　から衣橘洲

待桃花

まつほどの遠いは花のかざり雛十二ひとへや七重八重桃　四方赤良

曲水宴

盃のうかむ趣向にまかせたる狂歌は何の曲水もなし　輕少ならん

筆をさへ手にとりあへず盃のよりてたゞよふ岸は玉ぎし　あけら菅江

さかづきもさかなも水にながるゝはほろ〳〵ゑひ和九年母のかは　烏曉

寄花出替

去年まで櫻といひしお花どの花いろ繻子の帶も出來たの　酒上熟寐

手水とるたらひひさくのえにしあらばめぐりあはめやお花どのにも　山手白人

歸鴈

玉章のやはらかみなくかた田から春は歸鴈の時を期すなり

春の日わらはべのうたふ歌をきくに跡なる鴈に

物とへばおいらは知らぬとつい通るといひければ　樵山

よそに見し花の梢もつい通る跡なる鴈の身こそやすけれ　白人

燕　とめ女

つばくらの軒端につちをくはへ來てうち見るたびに出る子寶

おのが巣に土をぬる夜のあけぬ間はつばくらやみに羽をやうつばり　あけら菅江

雲雀

舞ひ雲雀籠の鳥屋が手に落ちてかふ直も高くあがりこそすれ　四方赤良

春月

春の夜はあんのごとくにかすみつゝ月の影さへおぼろまんぢう　山手白人

世の中百首歌の中に　荒木田守武

春の夜のおぼろ月夜と世の中のばくちうたぬにしくものはなし

春宵一刻あたへ千金といふ事を　一之

春の日のくれかぬるこそ道理なれ月しろもののあたへ千金　臍穴主

春雨

商賣もおのが業とてうれしげに朝からかさをはる雨の比　如竹

百首歌の中に春駒

春駒のきんのあたりも泥まみれあさる玉江のぬまつきにけり

やよひのなかば洲崎なる望汰欄にまかりけるとき人々庭より海づらの汐のひがたにおりたちて貝ひろはんとていざといひけれどはらいたうへりければ

やれ〳〵としほのひるめしいそぐなり青うなばらのへるにまかせて　あけら菅江

百首歌の中に呼子鳥　布留田造

あちこちの手次もいらぬ傳授をば錢のさせたる呼子鳥かな

別荘にまらうどを迎へけるにさかづきあまたたびめぐりて人々醉ごこちにおもひ〳〵のたはぶれをなして遊びける折しも窓ちかくきゞすのなくをきゝて　おはりやゑい女

みさかなに何よけん〳〵けん酒をのみにきゞすの妻したふ聲

百首歌の中に董　如竹

花ざかり過ぐるををしむ少年か岸のひたひにすみれみゆるは

歌合の中に杜若　布留田造

かゆがりのみかはにあれば八橋のつめでばり〳〵かきつばた哉

雲樂齋

紫の帽子のまよりかんざしであたまをきみがかきつばたかな

躑躅　山手白人

やどかしてくれなる里の岩つゝじ火ともし比の旅ぞ物うき

歌合の中に藤　布留田造

松の木のまたにかゝるは紫に染めした帶のさがり藤かな

秋葉寺より三めぐりの山のほとりの藤を見て　栗山

秋葉寺三尺坊のさがり藤ぶらり〳〵とみめぐりの花

放屁百首歌の中の欵冬　四方赤良

七へ八へへをこき井手の山吹のみのひとつだに出ぬぞきよけれ

籬に菊の苗をうゝるとて　目黒粟餅

心あてにならばやうゑんきくの花秋のこがねの色をたのみて

ある人の籠のうちにかひおけるほとゝぎすのや

よひのはじめよりなくをきゝて　あけら菅江

ほとゝぎす春をかけてか鶯のかひこのうちにかはれてぞなく

萬載狂歌集　卷第三

夏歌

百酒狂歌の中に首夏　曉月房

春くれしきのふの酒のさめがしらけふはうづきになりにける哉

一　百首歌の中に更衣　安井了忠

わび人の質こそたえねだしいれにかろきおもきや衣がへなる

歌合の中に　平郡實柿（池田正式一名）

花の香ををしみてけふも著かへぬをあはせもたぬと人やみるらん

花染の衣のわたをひきぬいて急なしごとを四月朔日　山手白人

化物百首歌の中に　物事明輔

けさははや夏もきつねが藻の花をかぶつて化のかは衣がへ　へつゝ東作

牡丹

けふこずばあすは色香もふりぬべし花の日數もはつ〳〵か草　子子孫彦

新樹交竹

たけのうちの流儀と見ゆる夏こだちはゞかりながらうち合ひてみん　山手白人

卯花

どろ〳〵と庭見の客は卯の花の雪おろしかと主や思はん　もとのもくあみ

虱百首歌の中に

山賤がしらみかきほのうの花はうつろふとてやこぼれかゝれる　栗梢

郭公

ほとゝぎすたづねくたびれ山道ですり火うちうつあひに一聲　から衣橘洲

ほとゝぎす須磨の浦ではなけれどもなれをまつ風村雨の空　平郡實柿

歌合の中に

ほとゝずなきつる方をながむればたゞあきれたるつらぞのこれる　馬蹄

郭公さつきはおのが時相場聲をはかりにかけてなくなり　無錢法師

友どちけんをうちける時郭公をきゝて

ふけゆけば月もすむゆの中空にりやんともきかぬはつ郭公　くさやの師鯵

三浦にて時鳥をきゝて

十分にかけたか船のほとゝぎす三浦の風に聲の落ち來る　腮長馬貫

水無月郭公

ほとゝぎすまちし心に汲みかへて井もみな月のしほがれし聲

ほとゝぎす鰹の優劣を人のとひ侍りし時　から衣橘洲

いづれまけいづれかつほと郭公ともにはつねの高うきこゆる　卯雲

鰹

かまくらの頼朝殿にどこかにてかつほもよほど大あたまなり

歌合の中に早苗　平郡實柿

またぐらやいとぬまく〳〵ぬまつかんふけだの早苗とれる早乙女

菖蒲　未公得

頼政にあらぬもけふは引取りてあやめを軒の妻に見るかな

ある人花しやうぶをおくるとてさちば言葉の花

しやうぶせんときこえければ　面楫似足

一番にさきがけられて花菖蒲わが太刀先もさみだれの比

五月五日祝儀の使者に對して　山手白人

立關へあがりかぶとの使者一騎あやめのねざし長い口上

鍾馗のぼり　卯雲

木綿より一段ひくき紙のぼりこれや鍾馗のおひけなるらん

柏餅　山手白人

なら坂やこの手にもちし柏もちうらおもてよりさすりてぞくふ

夕つかた人のもとへかしはもちをおくるとてなる子

夕月夜さすればこれもつれ〳〵のおなぐさみにはなれかしは餅

かたびらを人におくるとてやのくらのいろくす

一疋をふたつにたちて君がためかたひらをこそまゐらするなれ

何がしの庭に花たちばなのさかりなるを見侍り

しにもとは禁庭の右のつかさのたねなるよしを　好原萬圖伎

きゝて

木ぶりよくおひたち花の顔みればさすが雲井のおとしだねなり

百敷のみはしのもとにたち花をやしきのうちにけふみつる哉　四方赤良

百首歌の中に五月雨　雄長老

五月雨に黴びてなりともところ〴〵瓦のひたひに毛がはえよかし

廐五月雨　かくれん坊目隱

五月雨に廐も水のひた〳〵と庭はいけずき空はする墨

尾張の國鎌島木村氏にて五月雨の比に　へつゝ東作

かり初る秋さへみえて鎌しまや苗のはごとにかゝる五月雨

梅干滿筵　紺屋麻手

庭もせに匂ふむしろのすみもちてはこぶそばからこほれ梅干

人のもとより茄子胡瓜をおくられければ　輕少ならん

世にはまだすくなきふりのおくり物かたじけなすのかごのめづらし

隣水鷄　隣海法師

たのまるゝ隣の留主の柴の戸をたゝくを聞けば又くひななり

夏月　山手白人

さかづきを月よりさきにかたぶけてまだ醉ひながらあくる一樽

放屁百首歌の中に瞿麥　四方赤良

今朝みればいつしかよべをひりおきていとどねぐさき床夏の花

歌合の中に螢　平郡實柿

螢火も夜うちをするか夏草の青野が原にみだれ入るなり

卯雲

螢火を窓にあつめて物よむは川邊の草のくされ儒者かも

臍穴主

夜軍に尻のかゞり火ふりたてゝおひつまくりつ螢合戰

放屁百首歌の中に蚊遣火　四方赤良

しづが屋のかやりをふすべこく時はぶゝとなくかのよりもつかれず

題しらず　鳥山石燕

蚊と蚤にゆうべも肌をせゝられておるどはまだら目はふたがれず

古あはせよろひにせばや夕ぐれのときの聲あげせめてくる蚊に　雲鯉

歌合の中に氷室

とりちがへうちやくだかん氷室守おきなきびたる雪のかしらを　平郡實柿

去年から氣をはりつめし氷室守今夜は心とけぐとねん　四方赤良

夕立

薄墨のゑならぬ雲のあしばやにゆきゝの人もかける夕立　子子孫彦

野夕立　へつゝ東作

男なら出て見よ雷にいなびかり横にとぶ火の野邊の夕立

駒込や風の手綱の一通りかけを乘りたる夕立の空　藤本由己

駒込にて夕立を

鑓をどり畫きたる團扇に

あつさゆゑつかれつかるゝ鑓をどりさつと夕立ふりやれおふりやれ　雲樂齋

團扇

もとねにもならのものとてしぶ〳〵に手をうちは賣りかせぐ商ひ　雄長老

百首歌の中に泉

よるごとに式部がそゝやあらふらんむすぶいづみの水のくさゝは　蛙面房

振廻水

出しおく振廻水の心ざしあつき日なれば掬みてこそのめ

納涼　玉簾小龜

われも又涼しさのまゝ事とはんすみだ河原に夏はありやと

兩國橋にてすゞみ船を見てへつゝ東作

ながれゆく蠟燭の金がほしいなあ一夜三百兩ごくの船

芝浦納涼

竈元のしばの浦邊はすゞしくて火をたくなはのくるしみもなし

狂言師納涼　物部のうとき

山ひとつあなたの峯の木の間よりまかり出でたる月の涼しさ

三又納涼　物部早秋

すゞしさはまたもなか洲の浪の花ひるよりよるや盛りなるらん

佃島御祓　くさやの師鰺

丹誠をぬきん出船にみそぎして夏もつく田の海の中臣

みな月つごもりの日かけこひの來てせめ侍りけ

れば　あけら菅江

たくはへもみな月はてゝ一文もけふはなごしのはらへだにせず

萬載狂歌集　卷第四

秋歌上

立　秋　　未　得

立ちあへずはや吹きそむる秋風はこらへ袋のをやとけぬらん　　讀人しらず

山賤のとぼその草に露きけてけさはゑらふく秋の初風　　無錢法師

やう〳〵と今朝しも秋のたつか弓ひきなかへしそもとのあつさに　　大根太木

初秋郭公のなくを聞きて

ほとゝぎす八千八聲あまりてやけふ文月にふみかけて鳴く　　卯雲

芝居殘暑

とめ場でもとめ所なきあつさかな夏と秋とはいかゞ仕切場　　藤本由己

七　夕

年に一度おあひなされてぬる數はいくつときかまほし合の空　　讀人しらず

盆前にたれかはかねをかさゝぎのはした錢でもほし合の空　　智惠内子

質屋七夕

しちぐらにむしほしあひのかし小袖天の河原に末はながさん　　鹿津部眞顏

七夕琴

立琴をねかしてひざにいだきよせたなばたつめをかけてひこ星　　馬蹄

七夕酒

けん酒にかちてはゆびをおり姫のつもる思ひをうちはらふらし　　から衣橘洲

七夕瓜

いつの世にふたつの星となるこ瓜うまきなかごの名にはたちけん　智恵内子

七夕素麺

箱入のおり姫なれど此ゆふべ天の川原へ下りさうめん　栗山

七夕の夜殘暑のつよかりければ

ふんどしも腹もさらせし例あればこよひはだかでねるも手向ぞ　峯松風

盆前によみ侍りける

ぢり〳〵とこの身につまるひきがへるぬり盆まへのあぶらあせ哉　四方赤良

盂蘭盆

かけ乞のみるめかくはなうるさくて人に忍ぶのうら盆もがな　文月十三日かけ乞の來りてせちにせめ侍りければ　あけら菅江

鹽鯖のからき浮世のせめ太鼓うつやてん〳〵舞の一さし

盆踊待夕

夕暮をまつ坂こえて遠くからやつとせい〳〵來てをどるなり　坂上竹藪

中元

七夕にかしかんばんのふる物をけふ中元のきかへたるかな

新吉原の燈籠を見て

見物はゑいとうろうの夕ぐれをまち合の辻にけたりふみ月　山手白人

萩

はすはなる軒端の萩の秋風に碁をうつ蟬の耳やかしまし　平郡實柿

歌合の中に萩

餅ならば袖にも入れて萩の花都へはよきみやけのよ原　あけら菅江

葛飾の龍眼寺に萩を見侍りて

よせぎれと見ゆるお寺の錦かなどこもかしこもはぎだらけにて

萩見んとむれつゝ來るに藍さびのかすりの衣著ぬ人ぞなき　四方赤良

穢多村を過ぎ侍りしに萩のさかりなれば　山手白人

露よりも心を置きて通るなりこのひとむらは皮はぎの花

女郎花　四方赤良

をみなへし口もさが野にたつた今僧正さんが落ちなさんした

虱百首歌の中に　もとのもくあみ

吹く風に虱こぼれてをみなへし落ちにきとても人にたかるな

王子のいなりへまで侍りし道にて薄を見て　魚躍

しら露の玉を穂末にむすべるは秋のきつねの尾花とぞみる

唐詩のことばにて朝がほの歌よめと人のいひければ　四方赤良

しらず心たれをかうらむ朝がほはたゞるりこんのうるほへる露　星野氏かね女

かあいらしまだ夜ふかきに朝顔のあけなば咲かん身づくろひして

相撲　四方赤良

秋の野の錦のまはしすまひ草所せきわき小むすびの露

すまひ人谷風梶之助によみてつかはしける

かたやぐら巖石おとしさかおとし關は日本一のたに風　芦葉

荒海といふすまひによみておくる

思ふ國へきたは越後のあら海に波のうらわをてうどあばしほ　未得

露

見ごとにて手にはとられず白露のきえやすきこそ玉にきずなれ　平郡實柿

歌合の中に

水ばなに風の吹きしく秋の野はひけにも露の玉ぞちりける　曉月房

百酒狂歌の中に蟲

さかづきはめぐりてゆくをきりぐ〳〵す誰にさせとか鳴きあかすらん　猶影

百首歌の中に

垣壁にとりつく蟲のあはれさよいかにしにたうもなく聲のして　四方赤良

秋の夜の長きにはらのさびしさはたどぐう〳〵と蟲のねぞする　通小紋息人 市川升藏

題しらず

夏過ぎて三番さう〳〵翁草さあらば鈴蟲まゐらせんさい　朝寐晝起

質屋聞鹿

露のおくしち草わけてなく鹿はながす小袖のつまや戀ふらん　紀野暮輔

貧家三夕の歌の中に

見わたせばかねもおあしもなかりけり米櫃(こめびつ)までもあきの夕暮

萬載狂歌集　卷第五

秋歌下

月

月ゆゑにいとど此世にゐたきかな土の中では見えじと思へば　貞徳

めでた百首歌の中に　四方赤良

かくばかりめでたく見ゆる世の中をうらやましくやのぞく月影　曩庵鬼守

三日月

天の戸もよるのしまりのあればこそぴんと空鎖おろすみか月　橘貞風

空色の羅紗の袋にをさまりし薙刀なりの月ぞさやけき　燕斜

はづき十一日の夜月をながめて

きんこならかこひてみたき十題にひんと出たる月の面影　あけら菅江

八月十三夜月

そめ出來ぬこんやの月をなにがむれば秋のもなかはたしかあさつて　志月菴素庭

十四夜月

くるくるとひんまろめたらよからうにまだちとたらであすを待宵　濱邊黑人

十五夜月

くひたらぬうはさもきかず唐大和たつたひとつのもち月の影　山手白人

桂男は下戸か上戸かさかづきの影とは見えてもち月の空　筑波根岑依

名月の夜を晝にしてあそばゝやとりかへこうと鳥のなくまで　蘭水

お月さまいくつと問へば十三にふたつまさりてお名の高さよ　ちゑのないし

十五夜雨ふりければ

名月の雲間にひかる君まさでさえぬ雨夜の物がたり哉　燕斜

十五夜月蝕しければ

あかるまぬ柿とやいはむほん丸の月もしぶはんかゝる今宵は　梅人

十六夜月

しよく臺に手のとゞかねばいかにせんこぐらく見ゆるしん月の色　四方赤良

十七夜月

夕霧のまよひもいまだ晴れやらでいでし藤屋のいざよひの月　あけら菅江

十七夜月

ぬきはなす雲間の影はものゝふの腰にさしたるたち待の月　燕斜

居合腰でいまや〳〵とこい口のはなれを見たきたちまちの月

十八夜月

今少しいまちと〳〵とまたするは思はせぶりか二九の月かげ　志月菴素庭

十九夜月

とつくりとろくに居侍の月かげは天もく酒やひつかけて見ん　梅人

はながつをふして待つ夜の蕎麥切は桂男にのびくさつたか　燕斜

夜ごとに月のまとゐして

月見むとわがかよひぢの酒もりはよひ〳〵ごとに内もねかさず　志月菴素庭

かくまでもなきことの葉はくらやみのはぢを月夜にさらしなじやまで

高田の馬場に月見侍りて　高

月をめづる夜のつもりてや茶屋のかゝもつひに高田のばゝとなるらん

四方赤良高田の馬場にて十三夜より十七夜まで

五夜の月見しと聞きて　卯雲

團子夜中新月の色五つざしすこしこげたは曇りなりけり　智恵内子

名も高田はら一ぱいの月を見ておうれしいかのあつめ所や　卯雲

生醉見月

ひとつ過ぎふたつ過ぎたる生醉は三つばかりにや月も見るらん　から衣橘洲

山手月

月見酒下戸と上戸の顔みれば青山もあり赤坂もあり　四方赤良

浦月

芝浦の漁人も網をうちわすれ月にはいとふ鰯くも哉

疊指見月

かげ見ればあたらしおもて月今宵はりも疊へさす閨の床　もとのもくあみ

月前風

醉ざめの心もつきの縁さきに風のかけたるひとへ物かな　四方赤良

月前眼鏡

月かげをうつすめがねの玉うさぎひたひの波にかけてこそみれ　出來秋万作

月前碁

月しろに雲のくろ石うちはれて空一めんの盤のさやけさ　峯松風

月前三味線

さみせんのねられぬまゝに月見ればほどなく鐘も八つ乳なりけり　四方赤良

月前述懷

世の中はいつも月夜に米の飯さてまたまうしかねのほしさよ

十三夜月　栗山

つくづくと見ればどこやらみか月のをさな顔ある十三夜かな

月はひとつ影はふたつにみつ亭主客は七つで十三夜かな　藤本由己

十三でぱつかりはれし空われに月のさはりの雲もかゝらず　四方赤良

十三夜から衣橘洲のもとにて謠十三番を題にて

月の歌よみける時屋島を　へつゝ東作

十五夜としころひきあふ十三夜月かげきよに雲のみほのや

おなじく三井寺を

青樓にのぼりつめたる客ならめ今宵の月にかねつかふとは

おなじく高砂を

はだ寒やこのうらがれにほうろくもはやすみ取も月になつかし　四方赤良

おなじく田村を

あれをみよふしぎやなぐひおほ空にひとたびはなつ千々の月影

十三夜醉月樓にて二人の白拍子の三すぢのいと

ひきけるを聞きてよめるそのふたりの名は千代

とせとなんいひける

十日あまりみすぢの糸も長月のけふの月見は千代にやちとせ　地口有武

秋野遊

さあさわげさはけの螢秋たけて月より外にひかりてもなし　大坂道かね女

秋の野のそよゝ風にさそはれてはぎもあらはやねみだるゝ露

鴈　樋口關月

かり金もりの字に見えてわたるかなたが證文をかけて來つらん
鴈連山　濱邊黑人

天津空琴柱にたてる初鴈を十三峠に見るはめづらし
初鮭　卯雲

初鮭の一尺きりて二尺なしさしづめこれを君にさゝげん
新酒

痔のごとしなさけ所のいたみよりはしりといへる船のつきしは
新酒早來　濱邊黑人

とぶ鳥の鳥羽を出るよおりひてよく波をはしりて下り諸白
歌合の中に擣衣　布留田造

衣うつ槌おきわすれすりこ木をとる手に思ひ出づる旅人
題しらず　囊庵鬼守

秋さむき里のきぬたと新そばとどちらが先へうちはじむらん
鳴　山手白人

百八のたま〳〵ならす數かくは朝な夕なの鳴のかんきん
鶉あまたかひ置きける人のいかゞしけんみな落ちたると聞て　馬蹄

落ちたるはみなかひやうのふかくさにうづらなくなる道の寂しさ
歌合の中に菊　平郡實柿

菊水をくみし彭祖が長いきもまことにはあらじうその八百
菊を根びきにしてゆくを見て　未得

ほりてゆくこがねめぬきの菊の花いづくの家のたかねなるらん
菊のうたの中に　臍穴主

袖垣を横にこえたるしら菊は夜ばひ星とぞあやまたれぬる

蝶と見る花の弟の曾我菊は霜にもまけぬカづよなり
　　四方赤良

　　甑大菊

大菊をめづる狂歌ははな紙の小菊を折りてかくもはづかし
　　秦玖呂面

　　吉原菊

すがゝきの中にもつくりかざりたるおいらん菊の花の吉原
　　物ごとの明輔

　　化物百首歌の中に

見るうちにふり袖垣をうちこえて七八尺の大かぶろ菊
　　平郡實柿

　　歌合の中に紅葉

おく山の紅葉と見てや猿まろが尻をも鹿のふみわけてゆく
　　木端

　　高雄山の紅葉を見侍りて

くらべてはまことに雉とたかをやまけおとされたるよその紅葉ば
　　嚢庵鬼守

　　海晏寺にて夕ぐれに紅葉を見侍りて

時は今さるのしりとや紅葉ばのまつかいあんじてりまさるらん
　　もとのもくあみ

　　虱百首歌の中に

くふたびに尻をもみぢのあか虱かけばのこらず色づきにけり
　　四方赤良

　　放屁百首歌の中に

おはしたの龍田が尻をもみぢ葉のうすくこくへにさらす赤はぢ
　　山手白人

　　九月盡

秋もはやけふ一日にせんじつめ空も澁茶の色に寒けし

萬載狂歌集 巻第六

冬歌

百首歌の中に初冬　雄長老

いつはりのある世なりけり神無月貧乏神は身をもはなれぬ

火桶　卯雲

さびしさにかゝへていとまやりにくし火桶は老の妾同前

短日

冬の日に春の日あしをくらぶればもつたいなくもちんばなりけり

百首歌の中に時雨　讀人しらず

龍田姫せうかちけにやなりぬらんしよつとはしぐれしよつとしぐるゝ

めでた百首歌の中に　四方赤良

世の中は時雨(しぐれ)のやどり宗祇でもめでたい事のふり來れかし　志月菴素庭

水仙のいけ花を見侍りて

そりかへり又もこの様にいけらりよか葉もおもしろき床の水仙　へつゝ東作

反橋落葉

住吉の橋のそつたにかんな月かんなから〳〵ふる木のはかな

谷中落葉

はら〳〵といろはの茶屋へちりぬるは風や上野のやまけふこえし　油杜氏ねり方

歌合の中に霜

きめあらき松の木ばだは霜の後猶ひどにこそあらはれにけれ　平郡實柿

さかい町ふきや町二座の顔見せを見侍りて　卯雲

見わたせば二丁まちかね人に人さかいちやうちんふきやちやうちん

かほみせの夜やまひにふして　柏筵

顔見せのよるの太鼓をよそに聞きあくるわびしきかつらきぬ髪　未得

寒草

山人は冬ぞひもじさまさりけんあえ物ぐさもかれぬと思へば　平郡實柿

歌合の中に千鳥

眞砂地に道ある鳥の足かたはおのが名におふ千字文かや　布留田造

歌合の中に水鳥

とぎたてゝ持ちたる鴛のつるぎ羽にうちおとさるな鴨の青首　から衣橘洲

冬鳥

地をはしる翼なりけり寒中の見まひにたれもかもの進物　如竹

百首歌の中に霰

木々の葉にまれにとまるは是ぞこの嚙みあてし貝の玉霰かな　一之

冬の朝具したる從者のころび侍りければ

じやうはりの鏡のやうな氷みちすべると見るめはぢをかくはな　卯雲

初雪

のち〳〵は橇でゆきゝをしなのぢもまだ初雪はうす井峠じや　あけら菅江

青樓雪

ふる雪もよしや夜みせのすがゝきをひく糸道のあとはうづまじ　王子詣のきつね

ながめてはかよひくるわの雪の日もよしはら駕籠のよしや世の中　鹿津部眞顔

貧家雪

しら雪のふる借錢の年つもりはらはで家も横にねにけり　から衣きつ洲

童の雪まろげするを見侍りて

さむさにもやはかまくべきわらんべがまろがす雪の力くらべは

雪の上に米つきの臼こかすかたかきたる屏風　讀人しらず

ころ〳〵とこかして雪の上みればおもしろたへに道のつきうす
このうた河部川破風屋なにがしのいへの屏風にあ
りとなん

目くら佐野氏なる家に一夜とまり侍りしにあく　貸本人和流

るあした大雪なりければ

鉢の木のその時よりも多からめ佐野の庵につもるしら雪　澤邊帆足

雪中白梅

伯母さまが來たと兄きも笑ひ顔御馳走ぶりに雪をはく梅　雪の日友のもとより河豚くひにこよといひこしければ　から衣橘洲

命こそ鵝毛に似たれなんのそのいざ鰒くひにゆきのふるまひ

北澤といふ所にてにはかに寒かりければ青梅島

の小袖かりて著侍るとて　楚堂

綿入のあつき御恩をきた澤はあたゝかいめに青梅じま哉　紀廸

餅花香

もち花の火に落ち散りて匂へるはよべの鼠のはみあらしかも　柏筵

川びたり餅

紙衣きて川びたりもちしてやるはわが身ながらもぬれ坊主哉　布留田造

歌合の中に鷹狩

これたかのうき世にへをやきれつらんそりて引込むを野の山里　嚢庵鬼守

庭中早梅

我庭の梅のさかりをそのまゝに春までとくな雪のしら封　朱樂菅江

しはすの末に鴈の鳥をかへとてひとのもて來りけるをかはでかへすとて

かりがねときくさへぞつとしはすしまいやよなしても八百のとり　讀人しらず

歳暮

とれば又とるほどそんのゆく年をくれる〳〵と思ふおろかさ　あけら菅江

借金も今はつゝむにつゝまれずやぶれかぶれのふんどしの暮　卯雲

身代(しんだい)ははづかしながらむら薄かりちらしてぞ年のくれぬる　隣海法師

嚢中はおのづからこれ無一物(むいちぶつ)手をひろげたる年の暮かな　から衣橘洲

ゆく年のかげはいかほど鳥がなくあづまからげのあしおもげなり　嚢菴鬼守

行く年のひばり毛月毛おひくらし人間萬事馬子の境界(へやうがい)　蛙面房

まつ春の宵一刻の千金をすこしかりたき年のくれかな　婆阿

借錢の山路はよしや鳥の音をまねてもゆかぬ年の關かな　讀人しらず

びんぼふのぼうが次第に長くなりふりまはされぬ年のくれ哉　峯松風

弓とりのわれもつばさのあるならばしばし飛びたき年のくれ哉　四方赤良

ねがはくばとほり手形をうちわすれ跡へかへらん年のお關所　不自由物なし

犬百人一首の中に

ねぎり置きしさしもの質を命にてあはれ今年のきはもすぐめり　へつゝ東作

佛師歳暮

種々さつた佛も年をとり佛師かる地藏顔なすゑんま顔　好原眞圖伎

午の年のくれに

老いらくの里に近づくやせ馬の年のしりべたむちくれにけり　唐衣橘洲

としのくれに百人一首によつて人々歌よみける

とき

このくれはいつの年よりうかりけるふる借錢の山おろしして　平秩東作

五十六になりける年のくれに

七八もこの月ぎりに年くれておくにもたらぬもとゆひの霜

としのくれに石町月三師のもとにかりにる侍り

し時

願いしちくどく御禮は申さねどことしは安樂こく町の暮　藤のまん丸

節分

鬼は外福は内へといり豆に花さく春をまつ年のくれ

大晦日したしきくすしのもとより屠蘇散をおくりければ

元三の酒にひたすら屠蘇散をくれるはいしやのそん思邈かな　濱虎坊雞子

歌合の中に除夜

いつか我借錢こひに身をなして師走のはてにはたりありかん　布留田造

はらひにもならぬ物からせはしなや大つごもりの入相のかね　由緣齋

萬載狂歌集　卷第七

離別歌

百首歌の中に別　　如竹

朝な夕な窓の戸障子おのれさへたがひちがひにたちてわかるゝ

渡邊某にわかれけるときに　　樋口關月

しばらくも別れとなれば片腕をきらるゝやうに思ふわたなべ

三井長年がみやこへかへるうまのはなむけすと　　あけら菅江

て

たび衣きさまの店はふるさとにかへるにしきも仕入いくむら

竹本住太夫難波にかへるなごりに新うす雪物語

刀鍛冶の段をかたるを聞きてよみてつかはしけ

る

のぼりては又きく事もかたな鍛冶らい國としを待つぞ久しき　　四方赤良

卯月の比へつゝ東作がたびだちける時梅櫻松の

ゑをおくるとて

最明寺ときならぬ雪の鉢の木をやせたるうまのはなむけとみよ

もとのもくあみちゑの内子夫婦づれにて江の島

かまくらの名所見にまかりける時　　へつゝ東作

見てかへれ道べたながら筆柿のうみ山かけてうつしゑのしま

旅まくら鎌くらかけて夫婦づれ手をひきが谷鶴がおかさま

三島の宿にとゞまり侍りし比ある人狼の皮ぶと

ん尻敷にとておくりしが歸路の折から曉ちかく

たちいで玉くしげはこねの山をこえゆくに跡よ

りかのかはぶとんもたせつゝ人々見おくるとて
出來り山がこに尻敷しきてとく〳〵とあるに所
がらをかしかりければ　浮龜菴卷阿

毛蒲團を名殘をしかと思ひしに山中までは送り、狼
神無月の比加賀の國にまかりける人をおくると
て　輕少ならん

ふるさとへかへる錦の袖さへもにほふ小春の梅が加賀紋
めしつかふものの名は三ぶ六といへるがしなの
の國へかへりけるときに　ちゑの内子

そろばんの玉々おきしさぶ六がくにへかへるはにくの十八
三井嘉栗みやこにかへりける時へつゝ東作

富士きよみながめは駕籠の右ひだり長者のたびのはきもいためず

難波にかへるべき日も近づきぬるに醉月棲にて
人々うまのはなむけしければ　田中文起（竹本住大夫）

牛込のおもき御恩をせなにおひもうおなごりとぬるゝ片袖

萬載狂歌集　卷第八

羇旅歌

百首歌の中に旅　猶影

行きくれぬ宿かし給へ是非ともになさけをかけて旅の衣手

天龍川にて雨ふりければ　梅仙法師

天龍やしやぢくの雨のふる時はせんどらまごらともに迷惑

さやの中山にて　卯雲

としをへて又こゆべしと思ひきや御用なりけりさやの中山

鹽の山にて雨にあひて　山岡明阿

鹽の山さしたる事もなかりけりからいめをして見るばかりなり

するがのくにはらの宿にて　東平秩作

浮島かはらふ路銀もつきはてゝ三國一のふじいうな旅

藤澤にて　栗山

旅人をまつにかゝりて藤澤のゆぎやうずゐせぬ出女のかほ

十三夜に藤澤につきてあるこいへにていもをくひて　もとのもくあみ

芋をくひ屁をひるならぬよるの旅雲間の月をすかしてぞみる

九月九日ばかりに金澤を過ぐるとて道のべに菊のさかりなるを折りて駕籠にさすとて

四手駕籠なほさかてませよはひませ千代いき杖の菊の山道

八橋の跡見んと思ひしが駕籠のうちにねぶりて行きすぎければ　樋口關月

八はしを見んと思へど高いびきかきつばたにて跡になり平

美濃と遠江の國ざかひなるね物がたりにやどり
て　紀廸

まづうれし近江表にみのぶとんねものがたりのあひやどりして
かしまにまうでし舟の中にてぬす人ありとてひ
とびとさわぎければ　田阿

舟のうちによしぬす人はあなるとも楫より外にとる物はなし
くまののあま田川といふ所を過ぎて　太田茂弘

なめてみるくま野の口のあまだ川みつの御山のしづくなるらん
安宅の關にて　讀人しらず

山ぶしはかひふいてこそうせにけれたれおひかけてあびらうんけん
これは源よしつね山ぶしすがたにてみちのくに
へくだりけるとき強力のよめるとなんあひの狂
言にかたりつたへたる　柏筵

母のくまがへのかたへまかりける留主に
宰領はさだめて世話をやき豆腐わらひあたりがちやうど晝飯　内匠半四郎

廣澤の池にて

廣澤と人はいへども名にもにずさて又みての池のせまさは
高砂の浦にて

相生の松の夫婦のうみ手がらみよみどり子はきしの姫松
大井川をわたるとて　拙堂法師

今こえし小夜の中山それよりも大井川こそ命なりけれ
かひの國左右口といふ所のみてらに日數とどま
り侍りしにこのあたりの人朝なく〳〵ほろといふ
ものたうべけるがむぎの粉にててうじ侍りしも

のなりけり　浮龜庵養阿

旅ごろもほろの出るまで長居してうば口のはにかゝりける哉

からさきの松みにまかりける比賤が家に立ちより

て蕎麥たうべければ　秦久呂面

やすらひて松のしたぢもからさきのそらはつめたくひえの山盛

あづまに侍りし比元日に雜煮にむかひて故郷を

思ひやり侍りて　樋口關月

ふるさともけふのふとばしかみならし今やくふらん餅好の妻

東歩八十五首の中に三條　知眞

あさ酒にまだゐひもせず京をいでてふむあし一二三條の橋

庄野

わせおくてみな燒米の年貢をば何としやう野と物あんじ顔

荒井

はしもとや濱名納豆今きれてあら井てぞほすつぼとこをけと

江尻

さよ風におなかひえてやうばごぜの江じりかゝえて浦へこそゆけ　四方赤良

馬食町旅宿

夢むすぶ淺草まくら柳ごり花のお江戸に旅寐せしかな

いせの國渡會卓彦のもとにて　へつゝ東作

今ぞしるあこぎが浦のさくら鯛たびかさなれどあかぬ色とは

浦賀にて

西東うら賀は船の關ずまふうみをまはしのしめくゝりよき　竹杖爲輕　森羅萬象

旅宿巨燵

あすはとく旅寐のやどをおきごたつ道の三里もふみのばさばや

旅づかれやすめてねたりおき巨燵うすきふとんをかけ川の宿　畑野あぜ道

あづまに侍りける比すみだ川のほとりまつざき

といふところにて四方赤良あけらかんこう須原

の迂平などと酒のみて　業寂僧都

ふるさとのみやこ鳥をもうちわすれまつさきにゐふすみだ諸白　業寂僧都

萬載狂歌集　巻第九

哀傷歌

辭世

それ辭世さるほどさてもそののちにのこる櫻が花しにほはゞ　近松門左衛門

まぎらはすうき世のわざのいろどりもありとや月にうす墨の空　北窓翁一蝶

はるゞゝと濱松風にもまれきて涙にしづむざゝんざの聲　八百屋半兵衛

いにしへをすてばや義理も思ふまじくちてもきえぬ名こそをしけれ　おちよ

このうた青梅つばりざかりといへる淨瑠理のほ

んに見えたり

兄由縁齋貞柳が書きおける置土産といへる集の　紀海音

はじめに

しるしらぬ人を狂歌に笑はせしその返報にないてたまはれ　柏筵

辭世

つひにゆく道とはかねて芝ゑびのばからせ給へ極樂のます

柏筵がおきつき所芝のみてらにあればなるべし

柏筵をいたみて　讀人しらず

しばらくととめてみたれどつがもないかはいのものや死での山道

このうたある人のいはく晋子其角がなりと

辭世　慶紀逸

この年にはじめてお目にかゝるとはみだにむかひて申しわけなし

あなきたな今はみなみのひがしれて西より外ににげ所なし　來示

燈明の油煙はおほしゆきて又みだの御國のすみつくりせん　古梅園道惠

年ごろ圍碁をこのみけるが心地しぬべくおぼえければ

碁であらば思案工夫もあるべきが死ぬる道には手一つもなし　加藤道喜

母におくれけるをさなきものを見侍りて

とゝの目はなきあかせどもはどきゞの消ゆるあはゝもしらぬうなる子　もとのもくあみ

柳生くらの介みまかりけるとき　藤本由己

世に一手人のかたれぬ所あり無常の風の太刀さきをみよ

寶生九郎が妻をうしなひしと聞きて　樋口關月

妻うせし心くらゝに寶生はひとりむしやくしや物思ふらん　卯雲

文麗子をいたみて

君まさでたれが筆をやたのむべきわがかなしさは繪にもかゝれず　四方赤良

大根太木が一周忌に寄柏餅懐舊といふことをひ

とびとよみ侍りけるに

ひきうすのひとまはりにもなりにけり過ぎし昔のなつかしは餅　蛙面房

おなじ日門に虛無僧のきたりしをよびいれて尺

八をふかせけると聞きて

虛空までひゞく手向やこも僧の南無あみ笠でふける一曲　へつゝ東作

妻のいたみに

吹くからに山の神さへしなぬれば無常の風を嵐といふらん

老いぬればおなじことこそいはれけれおぢゝいとしやおばゝいとしや

藤田あかしといへる狂言師をいたみて　から衣橘洲

やるまいぞやるまい物をたれかあるとらへてくれよ死出の山人

ある人十あまり七とせの忌に寄蕎麥懐舊といふ

事を

思ひ出づる涙に袖をしぼり汁しるしの石の苔のむし蕎麥　古せ勝雄

無常

つひにゆく道とはかねてなり平のなりひらのとてけふもくらしつ　由緣齋

百首歌の中に

立法をつかふ樣こそなかりけれとかくしないでかなはざる身は　如竹

人生變化の心を

あすか川とえたりかしこく世をなげく涙もつひにあだし野の露　山岡元隣

萬載狂歌集　卷第十

賀歌

無一草のおくにかきつけける　志道軒

とゝんとんとんと逢坂關が原うちをさめたるよろづ代のこゑ

歌合の中に祝　布留田造

先以て御機嫌のよき君が代をおそれながらも祝ふめでたさ

寄民祝　未得

活計にはらのふくるゝ世にあへば天下たいへをこく土萬民

めでた百首歌の中に　四方赤良

あいた口戸ざさぬ御代のめでたさをおほめ申すもはゞかりの關

四方赤良の父自得翁六十一の賀に寄松祝といふ

事を　智惠内子

六十とせにひとゝせあまるひとつ松これから先のよはひいく代ぞ

千年と申すはおどけ松の春本卦がへりを十かへりの花　烏曉

六十になりけるとし松契多春といふことを　杵庵

琥珀にもなるべき松のやにおやぢねばり〳〵ていく春やへん

松久緣　一文字白根

よろづ代をせなかにせたら老松のみどりも久しかれいなるらめ

寄謠祝　塩屋から人

盃ををさむる手にも高砂のまづ壽ふくをぞいたゞいてのむ

寄鍋眞木祝　もとのもくあみ

鍋のしりかけどもつきぬすみの江の松の落葉はめでたき木なり

寄臺所祝　から衣橘洲

臺所どんどとなるは瀧の水いでいる客もたえずとうたり

寄餅祝　よみ人しらず

いくうすかつきぬよはひは千とせふる鶴の子もちにちぎりてぞくふ

寄鎗祝　峯松風

さて長い事かな君がおもちやりゆるがぬ御代の石突にして

寄船饅頭祝　無銭法師

千年の鶴見はおろか萬代も永久橋にちぎるまんぢう

寄碇祝　手柄岡持　喜三二

はんゐいやはんゐいやとて碇綱をうごかぬ御代のためしにぞひく

千とせ丸とかぎれる船も碇づなのながきためしに萬代やへん　酒上ふらち　繼川春町

寄枕繪祝　あけら菅江

床もはやをさまりてよいきみが代はもういく千代といはふ枕繪

髪置を賀して

なでそむる髪をおきなとなるまでにさあらば鈴をふれや千歳　内匠半四郎

くめや〳〵醉ふかしらがのことぶきの客もよろ〳〵養老の瀧　あけら菅江

何がし八十の賀に

いやがうへになほいやそぢのその餘計たんとならずばちとせでもへよ　から衣橘洲

何がしの母百一歳の賀に

めづらしや冬瓜の花のそれならで人のよはひも百ひとつとは　橘貞風

賀のうたとて

かぎりなき御隠居樣にけふよりはひかれまうして千代やへんてつ

ある國のかみの壽藏のつかをきづかせ給ひつる
を賀し奉りて　へつゝ東作

鶴のはし千とせもみまくほりうゝるうなる松江の君がことぶき
人の昇進のいはひにいなだといへる魚をつかは
すとて　から衣きつ洲

いなだまでなりあがりたるわかなごの出世はみえた御奉公鰤
喜鵲群簷　茶屋町末廣

一羽二羽三羽さう影松ばやし軒端にきはふよい烏とび
松に鶴の畫に　松良

松がねをほりて琥珀の出づるまで長きためしの鶴のくちばし
東作かしらおろしける時十德を贈るとて　三井嘉栗

十德は千代のかための文字の關そでもゆたかに通して下され

萬載狂歌集　卷第十一

戀歌上

題しらず　讀人しらず

戀といふそのみなかみをたづぬればばりくそ穴のふたつなりけり
ある人のいはく此うたは一休和尚のうたなりと
歌合の中に初戀　平郡實柿

種ふせてうゑし茄子の二葉より心ひとつにちぎる初なり
忍戀　臍穴主

わが戀は袖やたもとをおしあてゝ忍ぶとすれど腹に出にけり
待戀　大根太木

まつよはは雪踏のかねのかねてよりふみかよひけるうらの細道

たゝみ算おきてまつ夜はいたづらにあふみ表のうらかたぞうき　四方赤良

逢戀

だきつきてこよひはわれをしめころせあふにかへんといひし命ぞ　未得

煩惱の犬もありけば朧夜のほう〳〵眉にあふぞうれしき　四方赤良

別戀

そしてまたおまへいつきなさるの尻あかつきばかりうき物はなし　へつゝ東作

おさらばといひしことばが耳のそこに殘り多さよあかつきの空　四方あから

歌あはせの中に後朝戀

あひみては布施ない經にあらなくに何と涙をけさおとすらん　布留田造

いぎたなく目をすり鉢の音聞きておきわかれたる床のなき味噌　臍穴ぬし

歌合の中に不遇戀

わが戀はひきおひのある代官の胸算用をするごとくなり　平郡實柿

まち針はたてながらこそくちにけれ身せばの小袖まへあはじとや　四方赤良

百首歌の中に旅戀

我もせじ留主の間をたしなめといひてわかれし妻ぞ戀しき　貞德

片思

君がふくほうづきなりの提灯に身をつりがねのかたおもひかな　未得

そこ心くみてしらんとたちよればはねつるべなるかたおもひかな　臍穴主

無筆戀

いかにせん心のたけを一字でもにじくる事のならぬ無筆は　濱邊黑人

かな釘のをればかりだにかきもせば君にうちこむ身とはしらせん　雅貞

筆にては棒もひかれぬくやしさよ戀の重荷はかつぎながらに　和文

見文恨戀

うらみあれや返した文を三輪の山とはぬしるしの杉原の紙　空二

隔壁聞戀

ほとゝぎす鶯よりも聞きたきはこがるゝ壁に耳よりの聲　峯松風

臨期變約戀

いまさらに雲の下帶ひきしめて月のさはりの空ごとぞうき　唐衣橘洲

藝子忍戀

さみせんの音色もそれとしら糸のそまぬ藝子を戀しのび駒　黑染こもん

人目しのぶ藝子の袖のふりあはせころびあふとはこれをいふべき　丹青洞

躍子勸酒

をどり子のあひの手しほにとりざかなちよつとおさへてなげる盃　朱友達

裏店二枕

うらにすむ身もさび釘のくされ縁まくらふたつにうちつけた中　橘貞風

下女夏瘦

面やせし下女が二布は蕎麥切の色にやつれてあらふ夏川　茶屋町末廣

馬上見初戀

はねられん馬の尻目に見そめてもよめ遠乘の笠の内から　志月菴素庭

出替戀　古世勝雄

ぬかみそのくさきもあらぬ竹のよのはしたと末をちぎる出かはり

つゝめども色に出かはりする味噌のこき戀なかもいつかあさつき　紀定丸

題しらず　臍穴主

ひとりねにわれはふとんの柏餅かはいというてさすりてもなし

戀といふやまひはしやくの蟲なれや君にあいたやあひたしとなく　橘貞風

けいせいあさま山をゑがきてこれに狂歌せよと

人のこひ待りければ　藤本由己

夜目遠目けぶりの中にみえさんすむかしはふか田今あさま山

傾城待間夫　もとのもくあみ

身あがりのまつに思ひたをたきましてにくら椎柴こるばかりなり

ある人新吉原えび屋の遊女えびらのもとにかよ

ふと聞きて　四方赤良

えび屋なるえびらの梅の枝をりて盆と暮とに二度のかけとり

けころばしといへるうかれめやうのものを見て　滋野瑞龍軒

ふちならでせにかはりゆくけころばし二すぢかけて戀ひ渡らなん

新吉原にてひけ四つまへに江戸町のほとりを過ぎて　葉十

顔はかし手は黑がきの三味せんをてんつるてんのふり袖でひく

題しらず　早鞆和布刈

おいらんにさういひんすよすぎんすよ醉ひなんしたらたゞおきんせん

歌比丘尼　から衣橘洲

うたびくにくどけばさすが落髪のなごりゆかしきびんざさら哉　四方赤良

男色

女郎花なまめきたてる前よりもうしろめたしや藤ばかま腰　藤本由己

ひえの山にて掃部卿といふ所化ある兒に心をかよはしいとむつまじき中なりしを此ちご何事やらんにて下山させられければ

足引の山におかれぬしだらにてながく〳〵し夜をひとりかもねん　本阿彌柳夫

歌舞妓役者山下金作におくる

本阿彌も高しろ物とめきゝせんこがね作りのたちすがたには　あけら菅江

たえず涙の

そろばんのかけてあはぬもわりなしやたえず涙の玉ちがひして

高田なるするがやといへる茶みせにて田樂くひ

けるにとかう娘のもてなしければ　芦葉

するがやのふじな容にも盃のあいさうはよきでんがくや姫

かの娘玉子のふは〳〵もて來りて酒のめといひければ　奥政

ちぎりこそあれし板屋のえにしをばむすびたまごのふは〳〵の關

又かのむすめふきのたうをやきてすゝめければ　晩秋

霞にはちゐまさりたる春風やふきのたうにもたゞぬ小娘

ある人の婚禮の夜に雷のしければ　栗柴

かひぞへが心も空になるかみやこよひ陰陽はつげきの聲

人々女まじりにさぐり題とりて歌よみける時　月夜釜主

よるなれどよぎなき會のくらまぎれ探りだいたらうたがはれなん

白壁がゐがける女を見侍りて　山岡明河

繪にかける女てがらかいたづらにうごくといふはあゝおはづかし

新吉原大びしやのうかれめきさかたがもとにか

よひ侍りしに折あしくまらうどありとてつれなく

かへれといひしかばなさけなきと思ひしが歸る

道すがらうかれめの心をくみて　大の鈍金無　蓬萊山人歸橋

わるきをりかへんなんしのひとことはとめらるゝにもまさる嬉しさ

ある人古かね買の戀といふことをよめといひけ

れば　あけら菅江

袖の上になみだは雨とふるかねを高くかうてはあはぬ夜ぞうき

萬載狂歌集　卷第十二

戀歌下

寄雷戀　山手白人

みそめつる人は十九かはたゝかみなり平さまか光源氏か

寄疊戀　吳竹

なまぬるい野郎疊といはゞいへあの女なら尻にしかれん

寄柱戀　大竹のむさと

わが戀ははなれ〴〵の二はしら木に竹つぎてそひぶしもなし

寄竹子戀　讀人しらず

地にあらば君が草履とならばやといのる心のたけの子のかは

寄茄子戀　讀人しらず

あふ事のならぬなすびときくもうしみな約束はあだ花にして　から衣橘洲

寄大根戀

うきたびに袖しぼり汁からうじてしのぶ心をねりま大根　さくらん坊

色白のむつちりはだに青葉ならさこそはうれしからみ大根　關叟

寄芋戀

よそへふく風にかぶりをふる畑のいもが心の露もなびかぬ　恒子

寄柿戀

人目をばしのびもあへず色づきて心かよはす御所がきのもと　藤滿丸

枝たれていろにいづればいたづらに思ひのたねとなるやしぶかき

寄柚子戀

よそながら木末の色をみるばかりいつかとこゆのちぎりこめなん　秦久呂つら

寄鬼燈戀

ほゝづきのちぎらでひとりねふきよりいとど思ひのたねとこそなれ　加保茶元成

いつのまにか色づきそめしほゝづきを人のちぎらんことをしぞ思ふ

寄鎧戀

わたがみのひきあはせをもいのらまし袖に思ひを忍ぶ草ずり　樋口關月

寄刀戀

こしもとに手をかくるかとつかの間もいもが心につるぎたえせぬ　由緣齋

寄扇戀

秋はてゝ君にあふぎのつてもなしほね折ぞんと人やいふらん　大井無作登

寄釣瓶戀

くみてしれ人をつるべの綱手縄あはんとすれば引きたがふ身を　祝河彌

寄數珠戀

君輪珠數はなれまいにちくりごとにふたりねぶつの數をかさねん　樋口關月

寄碁戀

生死を相碁とちぎる中手さへ人目のせきにたちきられつゝ　小川卜仙

寄鯨尺戀

わが戀はくぢらとなりてものさしにつもる思ひのたけを知らせん　紀定丸

寄米俵戀

ちらとみし君に思ひをこめ俵大黒ならばふみやつけまし　山手白人

寄摺鉢戀

土性の備前すり鉢中のよいつまは木性でさぞ御さんしやう　算木有政

寄巾著戀

くよ〳〵と戀に心もむすこべやこし巾著のふら〳〵とやむ　物事明輔

寄十露盤戀

龜井算ひく手あまたになりぬれば身をいくつにやわりてあふべき　山手白人

寄煙草戀

こまかけて身をきりきざむ思ひあれどいひ出ん言のはたばこもなし　寄煙草盆戀

引寄するたばこぼんなうの犬なれや君があたりをたちもはなれぬへつゝ　東作

寄煙管戀

物思へばほそりにけらし雁首の長らうべくもなき命とて　寄灰吹戀

灰吹の青かりしより見そめこし心のたけをうちはたかばや　寄火入戀

きゆるまで思ひいれてもあふ事は猶かた炭のいけるかひなし　遊女たが袖

寄紙入戀

わすれんとかねていのりしかみ入のなどさら〳〵に人の戀しき　紀定丸

寄酒戀

胸はいたみ袖はいけだとなりにけりまたあふ事も涙もろはく　卯雲

寄鮓戀

蓼の葉もちよつとちぎりし一夜鮓ひるは人目のあればつけ〳〵　藤本由己

寄豆腐戀

名にしおふおかべのまくず葛たまりかけて思ひをすり生姜哉　卯雲

寄菓子戀

行平の賞翫ありし松風を屑なりともと思ふひとり寐　から衣橘洲

寄鰹戀

君が名もわが名も棒にふるがつほあたりの人の口にかゝりて　讀人しらず

寄鰻鱧戀

かくまでの心さしみをもちがつほさのみは人もつらからしみそ　四方赤良

寄飼鳥戀

あなうなぎいづくの山のいもとせをさかれて後に身をこがすとは　一文字白根

寄虱戀

思ふ戀手をかへ品をかひ鳥の一羽にはこのうちにせまりて　藪本醫止成

寄百足戀

かくとだにしのぶ思ひを人しらみこぼるゝものは涙なりけり　筑波根岑依

十五番蟲歌合の中に寄蜂戀

つばきはきしてつれもなき君ながらむかでの足の百夜かよはん　讀人しらず

こゝろにははりもちながらあふときは口にみつある君ぞわびしき

おなじうた合の中に寄芋蟲戀

うらめしな君もわれにやならひけんふわ〳〵としてつれなかりけり

おなじ歌合の中に寄蚕戀

心にはとびたつばかりなげけどもわがくふほども君はかひなき

ある人のいはくこのうた合は長嘯子なりと

寄仁王戀　一文字白根

一應できかずにわうの返事まであともうんともいはぬ君かな

寄達磨戀　紀のつかぬ

手枕(てまくら)にまつ間だるまのうきふしはとちめんぺきとおきあがるかな

寄幽靈戀　樋口關月

よしやすがたきえずはありとも何かせん腰より下のなき身なるもの

寄孟子戀　馬蹄

ほつそりと高いがせいはぜんなりとむかしの人もまうし候

寄山伏戀　から衣橘洲

せめかけてとう〳〵いのりふせにけりいざ下紐をときん鈴かけ

寄歌人戀　へつゝ東作

いとはるゝ身はうらめしき鏡山いさといふにもかほのくろぬし

寄儒者戀　大原久知爲

あつめつる螢にこがれ雪にきえ思ひにしみの家となる文

寄鍛冶戀　佐倉はね炭

かはらじとたがひにきたへあひづちの末はふいごのふうふとぞなる

寄節季候戀

せつき師走しげき人目のせきぞろをしのびて今宵ござれ〳〵や

寄舞樂戀　へつゝ東作

君をわれゐてんらくとも思はざるむかしの身こそごしやうらくなれ

寄樂人戀　濱邊黑人

君ゆゑにけふの試樂(こころみがく)ものらくらと還城樂(けんじやうらく)のへびつかふなり

寄大工戀

たてまへに札をいれても落ちぬ君は枕に塵のつもりちがひか

寄土細工戀　一文字白根

いつしかに君が心のうちくもりちぎりしこともうそのかはらけ

寄川越戀　もとの木あみ

九十川くよ〳〵物を思はせてなどあふ事のかた車なる

寄米春戀

ちぎりうすみ待つにこぬかと思ふ間につきしらけたる有明の空

寄茶摘戀　ちゐの内子

つゝめどもいつかほいろに出でぬるはあだし茶つみの極ぞそり哉

寄汗戀　かくれん坊目隱

かしてやりし汗手拭をかへす時べにつきしより思ひそめてき

寄花火戀　濱邊黑人

われからとはぢらふ汗は下にのみもゆる思ひのゆげにやあるらん

寄松鍜戀　から衣橘洲

物思へば川の花火も我身よりぽんと出でたる玉やとぞ見る

寄松誓戀　川長

かはらじと心のたけをしめかざりけふあふことをまつのうれしさ

姫松の姥(うば)となるまでかはらじなわれにふぐりのあらんかぎりは　卯雲

寄煎茶不逢戀　藤本由己

しのぶれど色には出ばなせんじ茶のあはでたつ名や釜の口おし

佐々木梶原先陣あらそひによせて待戀の心をよ　卯雲

めと人のいひければ

ふんどしがとけ候といふ聲はわれに夜這のふたりあるかも

阿房宮の賦のことばによせて里通ひの心をよめ　志水つばくら

と人のいひければ

客人は蜀山兀とはげあたま三百餘里を三枚の駕籠

萬載狂歌集　卷第十三

雜歌上

歌合の中に曉　平郡實柿

ねざめしてくびのまはりやうちまたをなづればゆびにあかつきの空

窓の戸をおしあけ方の目はさめて姿は床に横雲の空　臍穴主

歌合の中に山　布留田造

たかもゝのふじのねぶとは一夜にや雲の上まではれわたるらん

東歩八十五首の中に富士　知眞

眞白にたけゆき長のきぬをきて雲の帶する富士太郎殿　信海翁

つゝたゝば天にのぼらうふんのばす足高山やふじのねすがた
　　讀人しらず

おふじさん雲の衣をぬがしやんせ雪のはだへが見たうござんす
　　樋口關月

東路にふじと名高きお山こそゆききの人のみとれぬはなし
　　蓑庵鬼守

むかしたれたごに一ぱいくみし鹽をやきてやふじの山となしけん
　　盤齋法師

矢瀬にて辨慶石を見て

やせ法師辨慶石にせいひくしみこし入道くらべさせばや
　　輕少ならん

待乳山

よそになびく瓦の煙たつつゐつまだ來ぬ人をまつち山姫
　　古せかつほ

隅田川

すみだ川こぎゆく舟の名をとはゞ梅若丸といふべかりけり
　　十二栗園

見わたせばすみだ川原のうす煙たつた今戸を明けがたの空
　　あけらかん江

名におはぬ東のはての都鳥しろきは雪とすみだ川哉
　　輕少ならん

淺茅原

池の名の鏡のいへはふたもみもこれはあさぢが原とこそ見れ
　　あけら菅江

露をけさかればあさぢがはら〳〵とちるや鏡が池の水かね

すみだ川のけしきをゑがきてふたまきとし兩岸

一覽と名づけ侍るとて

兩國のきしによる波よるひるや舟のかよひ路一目わからん
　　鶴岡蘆水

深川の洲崎に鹽濱の出來たる時　讀人しらず

深川は江戸よりちかの浦なれば見にゆくとてもみちのくはなし

歌合の中に松　平郡實柿

にはかなる雨をふせぎしから笠は大松だけやとつてかつぎし

百首歌の中に竹　如竹

竹の子はをしやお汁のみがはりにすつかりときる藪の仲光

歌合の中に　平郡實柿

あとさきへいきや出づらんしづのめがしりほつたてゝふく火吹竹

歌合の中に關

大雪にゆきゝをふさぐしなのぢは是ぞ日本のかんこくの關

かまくらにて頼朝御所の跡を見れば今は畑となりければ　樋口關月

あれはてし頼朝卿の古御所のあたりは今もはたけ山なる

人々ともなひて茶辨當もたせすみだ川木母寺へゆきて

茶辨當あつくば水をうめ若の寺とて今もかどわかしゆく　三千風

自畫の像に

女房なし若衆はおかずこしもとゝ思ふかゆみにとどくまごの手　河太郎の畫に　讀人しらず

世の人のおのれと水におぼれてはとがを汝にあびせるぞうき

兼好法師の像に　もとの木あみ

かきたてゝみぬ世の人をともしびの影とならびの岡のつれ〴〵

蘆生の夢のかたかきたる畫をかりて久しくかへさでおきけるをとりにおこしければ

榮花なるろせいが夢をおこせとのつかひにあはのいひわけぞなき　一文字白根

墨繪松

さら〳〵と書きおろしたるすみの江の外にたぐひもあられ松原　から衣きつ洲

たけくまやくまどる松の一筆に上手の手ぎはみきといはまし　西行法師の畫に

ゆく水にうつる一樹のかげ法師これぞ他生のゑんゐ上人　辨慶の讃　碩賢（信州）

長刀（なぎなた）をつきに名高きむさし坊いくさより出ていくさにぞ入る　猿猴の畫に　讀人しらず

木末から猿が三疋三下りそのあひの手はてととてととてと　安宅の畫に　蛙面房

義經もとがしある身のあたかにて勸進帳をつくり山伏　竹の林よりとらの出づる畫に　卜養

よをこめて竹のふしとや出でつらんわれと時知るとらの一てん　田鼠うづらになりかゝりたる畫に　卯雲

ちゝつくわいちい〳〵くわいとなくならん田鼠うづらになりかゝる時　肖柏老人の讃　四方赤良

一日に一卷づつの古今集花のもとにて傳授しやうはく　兩國橋のほとりなる淡雪（あはゆき）豆腐をくひて　靜觀房

兩國の橋から富士の山かけてあは雪しろく見えわたるかな　芝きり通し長井町のしるこもちをくひて　讀人しらず

長井町とほくの人もみな知りてなみ〳〵もりの餅のよき哉　中村屋和泉橋出店に安井といへる暖簾（のれん）をかけて

しるこもちをひさぎけるに　隅田中汲

尻もちはあしこしつよきいづみまへ人もしるこは安井とぞいふ

酒百藥長　から衣橘洲

百藥の長どうけたる藥酒のんでゆら〳〵ゆらぐ玉の緒

大工酒盛　三疊たゝ見

酒のみて足もよろ〳〵まがりかねさす盃のみつ四つめ錐

さかもりなかばにもちをくへと人のいひければ　青陽

酒のみがこれもちくへとしひられてもみぢしながらたいらげにけり

酒もうつはにより侍るとて茶わんを出しこれに

てとありければ

ありあひのちひさく見えし茶碗より盃ばかりよきものはなし

肴賣生醉　酒上ふらち

はつざけに赤ゑひまぎれひらめかす尾ひれやはらをたちの魚うり

ある人のもとにて大盃にて酒たうべて　算木有政

いたゞくや三合四合七合と段々のぼるふじのさかづき

四方赤良がもとに酒肴をおくるとて　けい少ならん

酒一つあげはのてうしひら〳〵と君があたりにとんだお肴

題しらず　へつゝ東作

富貴とはこれを菜漬に米のめし酒もことたる小樽ひと樽

しなのものをめしつかひけるにことに大食なり　もとの木あみ

ければ

しなのもの大めしくらふそのはらをはゝき木ならばあんじもやせん

水戸より鹽からを竹の筒にいれて賜はりければ　藤本由己

鹽からを一筒われにくれ竹のよゝのねざさの肴にやせん
とのゐのかはり番に人をおこしてもおきかね侍
りければ目ざましにとてあめおこし米など出し
おかれけるに
かはらんとおこし米でもおきぬ時あめんぼうをやくらはしてみん
五風
茶めしをたきて人をとゞむるとて
なら茶とはあし久保思ひ給ふなよ君をうかしてはなしたきまゝ
宇治の川邊をゆくにことなう腹のへりければ　樋口闕月
むかしはるび今はわが帶のび候夫は梶原これは杉はら
鴨の涼のころ御手洗川の邊に納涼して鯉屋助六
が生簀の鯉を料理させて
こひよしと御手洗川にせし味噌煮けふは生簀もへりにける哉

ある人にながいもをやくそくし置きけるが程へ
てたよりなければ　卯雲
やくそくのぬらりくらりとながいもはもはやうなぎになりぬべらなり
そばをふるまはれけるに　坂上竹藪
あなにえやうましをとめのよいお子と手をうちたべる深大寺そば
波きり不動の堂のまへなるそば屋にてそばをた
うべて　酒上ふらち
うちよする客にそばやのいとまなみきりし手ぎはのふとうこそあれ
まらうどのあるじまうけし侍りし比四方赤良の
もとに申遣しける　祝阿彌
この時はかならず君をまつの宿ゐうて子の日はとにもかくにも
文月十二日の朝あけがたに雪級あるじの田町の

別莊にふと蓮見にまかりけるにゆくりなきあるじまうけにれいの醉ひ侍りて　あけら菅江

もてなしは露をたまちの水うまや濁にしまぬさらさはちすば　雪級

返し

にごりにはしまぬ蓮見の御馳走も何がな露を玉のさかづき　中臺翁

酢吸の三聖

子はあまく親仁の口はにがけれど女郎ばかりはするとのみこむ

放蕩なるはかせの壁にかいつけける

三兩の質も仁義も色にかへ師ののたまくにこまる門人

新吉原ふしみ町の茶屋玉屋がもとにてふくろく壽の畫を見侍りて　へつゝ東作

御存じのあたま勿論このやどはしりの長いもふくの神なり

富本豐前大夫が弟子豐みつ豐ぎく豐ぎに豐松といへる四人のいらつめの名をたていれて　地口有武

豐みつが淨瑠璃きくも國の花はままつ風の音はざゝんざ

春秋音樂　針口いたき

春秋もその時々をゑてんらく花はちいるら月はてゑるら

商人彈琴　竹杖すがる

いとまなみ二十五桁の玉ごとにねもたかぐとはじく爪おと

題しらず　風來山人

この調子きいてくれねば三味線のちりてつとんとひいてしまふぞ

時計を見て　觀流齋原富

跡へとはかへらぬ時計一分づつきざむこのみを見るも物ずき

四文錢　讀人しらず

代物のうら見わたせば一もんの新中納言波にたゞよふ

ねつきといふはいかい師宗匠のひろめに發句と

きぬをおこすべきに發句ばかり來りしかば　百菴

ねつきどのしたからよめばきつねどのほつ句ばかしてきぬはこん〳〵

山家鶴　梅旭

山里はゆたかな梅のりん和靖人も仙人鶴も千年

春章が俳優のにづらの畫を見て　菊の聲色

あめつちの臺屋がかける花鳥にいざ聲色をそへて見せばや

みづから家の内を掃除し侍りて　萬の千里

われもけふ自身に口をたゝきばきおひげの塵はとりあきもせず

さかもりの席にて　俵の小づち大黒屋庄六

盃をさすがいなにはあくまよりうき世のちりをまづはらひけり

田舍興

たのしみは春の櫻に秋の月夫婦中よく三度くふめし　花道つらね五代目市川三升

萬載狂歌集　巻第十四

雑歌下

題しらず　讀人しらず

あぶみにも鞍にもならず燒捨てよようなき人のまがりこんじやう

此うたある人のいはく山崎宗鑑がなりと

讀人しらず

何となく人にことばをかけ茶碗おしぬぐひつゝ茶をものませよ

此うたある人のいはく利休居士がなりと

讀人しらず

百首歌の中に山家

杣の代わりたつる家はあのくたら三百ばかり入りにけるかな

大根太木

借錢の山にすむ身のしづけさは二季より外にとふ人もなし

こもりくのこたつに足をふみこみてふとんの山に身はのがれつゝ　臍穴主

なか〳〵に山の奥こそ眞柴垣うき世をとんとのきの松風

山家三味線　面楫似足

さゝがにの糸のしらべも音高く雲井にひゞく山彦の聲

青山にかくれし口ずさみに　懶翁

百が味噌二百が薪一朱が米一分自慢の年のくれ哉

かしらおろし侍りし時　山岡明阿

けふからはころり坊主になりひさご人にかゝりて世をわたらばや

すみだ川のほとりなるある山寺にてかしらおろし侍りける時ほとゝぎすのなくを聞きて　もとの木あみ

わが年もほどとき過ぎぬさらばとてつぺんかけてそりこぼつなり
　とし頃のほいとげてまろきかしらになりけるに
　も好物の味は猶わすれがたくて　へつゝ東作
黒髪をおろし大根のりの道佛のそばや近づきぬらん
　かしらおろし侍りて名をあらたむるとて　婆阿
むすぼれし婆阿のすさみの麻糸もうむの二つをはなれやはする
　四十には二とせたらざりけるとしかしらおろし
　侍るとて　莊夢
紅葉さへちりて立田に名をのこす我名のこらじ人もをしまじ
　相撲取遁世　腹可良秋人
わけて猶淋しき庵のすまひとりもみや浮世の塵はつかまじ
　述懷　紀野暮輔

前の世に無間の蛭もくはぬ身の此世はかねにせめられにけり
　風來山人
かゝる時何とせんりのこま物屋伯樂もなし小づかひもなし
　きねや仙女
から猫のみすぢの糸につながれて何の因果にばちあたる身ぞ
　玉簾小龜
面影のかはらで酒のつのれかし終には下戸の赤くなるとも
　壽角
顔による波の音かは耳もなり歯もこゆるぎのいそぢすぐれば
　四方赤良
いたづらに過ぐる月日もおもしろし花見てばかりくらされぬ世は
　寄刀述懷　早稲田の翁
さすが又のがれがたなのふるみにはやきばもしるく翁さびたり

とし比劍弓鎗の術にあそぶといへどもいまだ眞
理を得るとしもなければ　吉田氏

弓斷なくやりてみるほど奥ふかしいつあきらむる事やあり劍
百首歌の中に懷舊　如竹

祖父祖母すくみかどんでつぶやくはみなこしかたの物語かな
歌あはせの中に　布留田造

形見こそ今はあだなれなき親のゆづりおかれし貧乏の神
平郡實柿

いにしへの酒友だちをかぞふれば十人のしうは九人ないそん
油煙齋

祖父は山へしばしがほどに身は老いてむかし〳〵のはなし戀しき
腑穴主

てん〳〵をうちしあたまも赤本のむかし〳〵となりにける哉
題しらず　柏筵

生きて居て心の駒をせむるかなのりうりばこと花うりばこと
此歌世にしる者稀なり此集をあめる折から花道
のつられが物がたりをきゝて書きくはへ侍り

いやな物といへる心を　讀人しらず

直になき國の奉行と蠅のみ蚊癩瘡佞人どれもいやなり
此うたある人のいはく秋の道場にすめる音あれ
のよめるなりと　から衣橘洲

發斑といふものをやみて
顔も手もかのこまだらになり平のうたてやてうどふじ三里まで
齒をなやめる時　蓑庵鬼守

今はたゞぬかんと思ひきり〳〵すなく〳〵露のおく齒かゝへて
病にふしゐける比玉川といふ所より友だちの來
てとひければ　四交
ねてゐればおいしいものもあげられずたま〳〵川のお客なれども
世の中しはぶきやみいたうはやりけるにその比
世にならびなきすまひに谷風梶之助といふあり
この比の風つよければとてみな人谷風といひけ
れば　あけら菅江
水ばなのたれかはせきをせかざらん關はもとよりつよき谷風
としごろそひ侍りけるめのいたくわづらひける
折ふし鷄の宵に鳴きければ　白駒
にはとりのそらねにあらぬよひなきは病と福をとつけこうしよう

ある人遺精を月に六七度づつゆめみて心地あし
ければあるくすしのすゝめにて熊膽丸日ごとに
三たびづつ服すれどしるしなしといふを聞きて　栗山
すゝめられくまのゐ三度まゐれどもまだめぐらぬかいせい七たび
鴈がさをうれふる人のもとへ　さくらのはね炭
春過ぎてとこよにつきし鴈がさももはや藥にあきや來ぬらん
齒をいたみてうちふしけるにある老女のまめや
かに柳のやうじに梅若とかきてくはへよとすゝ
めければをかしけれどさすがにもだしがたくそ
のごとくせしにはやいたみのやはらぎたらんな
どせはしくたづねければ　樋口關月
梅若とかきし柳のしるしにてけにつかのまはいたみわするゝ

ある人品川に遊びて痳病をうれへけるを聞きて　四方赤良

行きやらでとまるえきろの鈴口のえんにふれてやりんとなるらん

花道のつらねのもとにて神竝周全といへるくす

しにあひ侍りしが狂歌の名をこひ侍りけるに折

ふし雨しきりにふりけるを見て風早のふり出し

とやよぶべきとあるじのたはぶれければ　四方赤良

風早のふり出す雨のをやみなくはやるは君が福の神竝

返し　風早ふり出し

雨ふりて地かたまる名もあらたまるよい風早のふつき萬福

儒者逢雨　腹可良秋人

肱をまげてまくつて走る俄雨傘さす人も其中にあり

屁ひりの弓術　竹杖すがる

ひいふつとすいはの征矢の高なりはぶるさかんなる響なりけり　讀人しらず

猿引

たらぬ毛の三筋の糸に引あはせ人にまさるの藝をするかも　山手白人

梓みこ

よりもこぬ梓の弓をひきいれて百一升は高ゐぼし哉　壽德

題しらず

おもてには伏羲神農かざれども内は張介ひんな藪醫者　山岡元隣

仙道不用

古語にいはく命ながければはぢ多しよくまなびても何かせん術　荒木田守武

世の中百首歌の中に

とらにのりかたわれ舟にのれるとも人の口はにのるな世の中

ある人鏡をぬすまれしと聞きて　藤滿丸

天下一大事のものをぬすまれて日々にをしさのます鏡哉　石部金吉

ふるき骨もてつくれる扇に

かんりやくに千早ふるぼねもちひしはかみ屋もきかぬためしなり平　から衣橘洲

晴天傘

下駄の音もかんらからかさ玉ぼこのみちかへ日和さすがはづかし

甲斐の國鏡中條といふ所にて菊の花ゑがきたる

扇をひろひて　亭々

よい事をきくにつけても末ひろく思ふ心のかゞみ中條

題しらず　兎十

京草履大阪あしだ江戸へ來ててりふり町の中のわるさよ

ゆるむともよもやぬけじのかは鼻緒かしばのあしだあらんかぎりは　紀のうら人

足駄の歯入　四方赤良

世わたりのやすきもよしや難波江のあしだのひとは入るゝばかりは

明和九年卯月の比浪花より來りてかつをぶしあきなふ人にかはりて人のもとへよみてつかはしける　久敬

かりねせし宿はあしびの烟にて何かなにはの一ふしもなし

家のかまちにてかしらをうちて　大屋裏住

此家はたとへのふしの火うち箱かまちでうつて目から火が出る

ある方のこしかけにやすみゐける下部のねいり

て陰嚢のあらはに見えけるに　樋口關月

きん玉よぬしはたれとも知らねどもぶらりといでし下がへの妻

樋口關月にはか雨にあひて傘かりにとて人おこ

しけれどたゞ一つある傘をはや人にかしければ　秋山玉山

かる人にこれは一本させましたさればこ二本はもたぬ傘とて

返し　樋口關月

さしつけて御無心まうす傘のほねぬ折ぞんになるぞかなしき

かづさの國山の邊の郡のあるみてらに赤人の像

ありと聞きていきて見けるにその像閻魔王のか

たちし給ふあまりに興さめてその夜同じくとも

なひ侍りける廣澤翁のもとに申遣はしける　東里

赤人の借錢すます折なれやのこすすがたのえんま顔なる

廣澤翁返しはなくてその歌のかたはらに抹香抹

香とかいつけ侍りしよし自筆の書に見えたり

むさしの國芝のはまべに柳屋とて小刀鏹などあ

きなふ家ありある日旅僧の來りて鼻けぬきをか

はんとて手にとりこれはよくくふかと問ふにあ

るじ本來空なりとこたへければ

くうならばたゞくれなるのはな毛抜やなぎがみせはみどりなりけり

といひてかのけぬきをもちて出でゆきぬるよし

を聞きてそのあるじにかはりて　卯雲

あの坊主ちやんが一物ないと見えくれなるけぬきみどりにぞする

狂歌袋を製してかけ侍るとて　もとの木あみ

はぢあへずわれもかはづのうた袋はしらのつらへかくる水引

つけ木をかりの枝折にして

あと先に心つけ木を枝折にて硫黄の花のことのはも見ん

和泉式部の寺に開帳ありける比さそはれけれど

さはる事ありてことわり申遣はすとて　樋口關月

無遠慮に男はどうもゆかれまじ和泉式部のお開帳には

ある人のもとへ碁うちにまかりけるにかねての

やくそくたがへて留守なりければ　小祐

碁をうちに居るべき筈をけふよそへゆくはりくつにたがいせん哉

ある人三番叟のけいこし侍りしにはかに雨の

ふりければ　から衣橘洲

三番叟ふるはすゞしき雨ながらもとの天氣にお直り候へ

灸をすうるとて　子子孫彦

ちりけよりけんぺき七九十一のきうな飛脚は三里一つ時

京祇園の百合女がかける杜若のゑに　讀み人しれ多

京染の姫ゆりなれど赤からで江戸紫のかきつばたかな

題しらず　坂東五十夢

わきざしのつばきもちまで手をかけて生醉かすてらようかんにする

虱百首歌の中に　もとの木あみ

筒いづついつも虱はあり原やはひにけらしなちと見ざるまに

四方　星屋光次

彌陀たのみ藥師もたのみ猶も又無垢世界にて千とせたもたむ

南枝よりひらくる梅の春くれば匂ひ北野と西陣の沙汰　塵毛あた多

五行　富士鷹なす

金に花さかす相撲の土俵入勝負は火水見ては木になる

金のなる木のおふる土もたぬ身は火に入り水に入りてかせがん　星屋光次

五色　節藥中貫

青漆の重に赤飯つめさせて胡麻鹽づつみ黄菊一えだ

青豆や黑豆あづきうるみせの葛やきなこもみな一つ升　星屋光次

題しらず　壽德

大つゞみ大こばんとう番がしらひものかんぶつとうしからかみ

萬載集をえらび給ふと聞きて　紀野暮輔

わが歌も萬載集にもしいらばまことにめでたうさふらひにけり

萬載集の板なりける時　板元伊八

小法師の筆に硯の池のはた山のさくらは板もとの株

萬載狂歌集　卷第十五

雜體

短歌

鼠物語のおくに　讀み人しらず

ねずみめが　心はやみに　あらねばや　くるゝをまちて
むばたまの　夜にだになれば　くらけれど　みちもまよはず
はしりいでて　よろづの物を　あづさ弓　ひきもてありく
うたてさは　いふばかりこそ　なかりけれ　さりと思へば
子を思ふ　みちにやまよふ　みちもなし　かきねをくぐり
あらがねの　つちのなかへも　ほりいりて　巢をつくりては
子をそだて　また久かたの　空にゆき　けたうつばりを

ありきつゝ　ものをほち〳〵　かぶるにくさよ

反　歌

子を思ふ心のやみにねずみめはまよはねばこそよるありくらめ

此うた榻鳴曉筆に見えたり

儒者述懷

きんまくや　土はかせの身の　はかなさは　あしたに道を　讀み人しらず
聞きはつり　夕に死ぬも　可なりなど　いひつゝ後世も
ねがはれず　しののたうまく　しのにのみ　人しらぬ氣を
はるの野に　あさるきゞすの　けん〳〵を　色にかへよと
はぢしめて　となりのむすが　袖をだに　ひくにひかれず
けつげきも　きるにきられぬ　内弟子の　わかしゆの顔の
むさくろし　ましてやよそに　みつぶとん　おやすみなんし

きなんしに　まみえんことは　かたいとや　口三味線の
天たゝん　天とだまらず　蔦とんで　魚さへふちに
をどり子の　舟行はまた　夢にだも　見ぬ世の人の
友ばかり　もとより貧に　なりひさご　水ものまれぬ
顔淵が　かひしおかべの　からうたや　みそじひともじ
ひとよりも　思ひあがれど　わづかなる　禮儀三百
店がりの　晦日のやみを　いかんせん　あはれ富貴の
もとめられば　馬の鞭とり　屁もかごと　孔子もいはれし
ためしあり　とてもはやらぬ　道しばの　露のかごとを
たなへあげ　いかだにのりて　あら海の　そこともなしに
うかれ出でん　佐渡の金山　どこにあらんかも

反　歌

世の人をくそのごとくに見くだして屁つぴり儒者と身はなりにけり

伊豆の國天城といへる山中にて花を見てよめる　へつゝ東作

やまとには　いさまだ知らず　もろこしの　とらふす野べの
けしきをも　かくやと思ひ　いづのうみ　なみのたつみや
むまひつじ　さるのこのみと　なりいでし　大しまみやけ
あけくれに　見ればこそあれ　おそろしき　くますむ山の
あなたふと　みことかしこみ　おほがみの　はこふみわけて
たゞひとり　すみのかまどの　夕けぶり　心ぼそさを
もろともに　あはれと思へ　さくらあめ　あまぎのたけに
つもるゆき　はるもきつねの　尾さきより　かのこまだらに
消えぬれば　きこりのしづも　あさぎぬの　いとまありげに
まかり出て　花見じらみの　うはばひに　うさぎの耳の
長き日を　のめくりまはる　さはうなぎ　さんしやう魚の
つけやきに　やまめのなます　やまのいも　ほりしひ茸を
かきあつめ　酒は目に見ぬ　鬼ころし　あるは熊坂諸白の
名さへおそろし　長範が　かけつぼざらに　ごす茶わん
むさゝび聲や　ねずなきに　まじるたぬきの　はらつゞみ
うたふもまふも　さわがしき　いたちみめよし　むらをさの
はこいりむすめ　山の神　そゝなかしざを　とり出して
ならすひなぶり　ぶりしやりと　はねまはらぬも　世の中よ
やほこそなけれ　思ひいる　山のおくにも　しかあれば
すみよかりけり　炭よかれと　いはうて三度　めぐるさかづき

反歌

醉ひしなば櫻にうづめわがからのくつるやこゝも小野のすみがま

旋頭歌

一の谷にて　岩手宗也

平家武者さびたる小手のてつかいが峯をおとすは

九郎判官殿なりけり〳〵

寄謠祝　から衣橘洲

よい時にあふむ小町やその玉だれのかゝる世に

すむやうれしきすむぞうれしき

折句歌

小幡何がしの和歌の會にいくよもちの出でけれ

ばそれを句の上におきて　藤本由己

いかい事くはるゝ物ぢやよい風味ものもいはずにちぎり〳〵て

おめでたいといふ五文字を句の上におきて農業

の心をよめと人のいひければ　四方赤良

おとに聞きめにみいりよきでき秋はたみも豊にいちがさかえた

物名

りうたん　あけらかん江

こと草はかるたとみれど小六月七八九十きりうたんかも

木名五　へつゝ東作

かさもなしぼくりももたぬひとり身のつらさよ時雨とくはれねかし

桐　梨　栗　桃　桑　樫

きりもなくしぐるゝころもみじかき日これで天氣にあすならうかや

楓　紀定丸　柏

木名十

見よかしとちぎりしひぐれまつさかやをどりくり出せしひてさはらじ

樫　樣　桐　檜　槙　松　柏　栗　椎　椹　濱邊黑人

廻文歌

寶舟のうた　　讀人しらず

ながきよの十のねぶりのみなめざめ波のりふねの音のよきかな

ある人のいはくこの歌全浙兵制附錄日本風土記に見えたり日本の琴譜なりと

摘草によせて廻文歌よめと人のいひければ　　もとの木あみ

むらしばでみつゝつみ草名はしらじ花さくみつゝつみてはしらん

萬載狂歌集　卷第十六

釋教歌

授戒し侍りし比ある人の來りて汝が釋門に入りしもまたれいの狂言にてまことの道をしたふにはあらじなどあざみ侍りければ名取川の狂言を思ひいでて答へ侍りける　　祝阿彌

かゝる時すくはせ給へ名とり川今よりあみに入りし身なれば

すぐせのえにし深かりける人にや誓の海に歸入

してしきりに宗門の沙彌戒をうけたもたん事を

ねがひし人の需に應じ祝阿彌といへる法號をさづけて長く師資の契をむすび侍りければ　　師の坊

世を救ふ御名をなのりて法の舟ともにさしゆくあみの衣手
　　讀人しらず

自畫の像に

目は見えず腰はかゞまる齒はかける南無あみどうふたべるばかりぞ
　　拙堂法師

題しらず

ほくろくと同じ火宅の人心氣をいるもありほうずるもあり
　　から衣橘洲

ほとけもとわしの山よりいでし故か今の法師のつめの長さよ
　　卯雲

百丈禪師の畫に

七條や九條の袈裟の和尚をも直下に見なす百丈禪師
　　花道つらね

布袋

經山寺みそか知らずのたのしみは本來くうてねたりおきたり
　　から衣橘洲

その中は有無をはなれし布ぶくろ子煩惱こそ卽菩提なれ
　　山手白人

本來は一物もなき布ぶくろあけぬうちこそ寶なりけれ
　　橘貞風

題しらず

まん中にきつとすわらせ給ふのが行基ぼさつの御作なるべし
　　未得

清水にまゐりの人は觀音の堂といふより馬とゞめ哉
　　貸本人和流

むさしの國目黑の不動尊にて

この瀧のながれの身とて不動尊ふたりかぶろのせたかこんがら
　　西國札所四番の觀世音にまうで侍りて　　內匠半四郎

九重の守の緣起くり返し又まきのをの寺の寶物
　　江戸六阿彌陀に一日のうちにまうではべらんと

てうまの貝ふく比あつき日をしのぎつゝ沼田の
みだのみまへにぬかづきて　澤邊帆足

日を背負て重きあし間をゆく沼田くたびれし身に南無あみだ笠
善光寺如來開帳の時朝參りの人を見て　婆阿

挑灯の數は田ごとの月ふけてあけやしなのの開帳の庭
眞乳山歡喜天にまうで侍りて　あけら菅江

わに口をならせばまつち山彦にこたへてひゞくくわん〳〵ぎ天
大山參喧嘩　算木有政

はやり男が氣も石尊のつかみ合ひ中を直してはや納太刀
文月十三日新吉原にまかりけるにあまたあそび
どもの朝日の如來にまうづるを見侍りて　文莫女

うかれめのつみもあさ日のかげ頼む二世の願にみせの苦はなし

むさしの國羅漢寺にあらたに右繞三匝の堂をた
てゝ百の觀音さつたを安置せしがその堂ののほ
りはしさゞえに似たれば人みな榮螺堂とよび侍
りしを　四方赤良

觀音に魚籃もあればなまぐさき榮螺堂とはいはしにた鍋
木魚　山田僧都

うろくづもつみをのこらずたゝかれて佛のまへにうかみいでたり
旦那寺より佛餉こひにおこしけるがあまりに大
きなればその袋にかきつけ侍りける　大根太木

すくなしとみよの佛やみますらん後生のためにしやうつむれば
ある法師の說經するを聞きて　讀人しらず

らう竹のすぐな教にやにもなくのみこみやすきのりの一ふし

日光のやしやびしやくといへる木に慈悲心とい
へる鳥のとまり居る畫に　卯雲

内心の如夜叉びしやくもをれぬべしこの慈悲心の聲を聞きなば
可信佛道といふことを　伊田可竹

あふぐべしのりのをしへのなかりせば座禪衾もつゞられましや
おしゑをつくるとてのりをおすを見侍りて　蛙面房

もとよりも米の菩薩と思しめしをしへののりをときのべ給ふ
放屁百首歌の中に　四方赤良

おろかなる人はぶつとも放屁ともしらではかなき世をやへひらん
大津繪の鬼を見て　あけら菅江

南無阿彌陀ふつとさとりし發心に鬼もさつそく滅無量罪

萬載狂歌集　卷第十七

神祇歌

世の中百首の歌の中に　荒木田守武

世の中にふとかるべきは宮柱ほそかるべきは心なりけり
むさしの國神田の社にて神酒德利をふり見て　六位大酒宮地黄坊樽次

當世は神もいつはる世なりけりかんだといへどひや酒もなし
神祇　未得

おはらひの箱をはりぬる神わざにそくいをおしのひまもなげなり
百首歌合の中に　平郡實柿

神もさぞ聞きて心地やよかるらんみことときねとるよかぐらの音
讀人しらず

御代なれや古がけまでも酉のとしいかな家にも御はらひが有り

これは寶永二年酉の閏四月いせ參宮ぬけまゐり多き時にある人のよめるとなんかたりつたへたる

三めぐり稲荷社奉納に夏神祇　から衣橘洲

ほと〻ぎす田をみめぐりの神かけて雨のふる句をふり出てやなく　四方赤良

みめぐりに早苗とりゐの乙女子がかさぎぞ夏のしるしなりけり

寄米春神祇　もとのもく網

立臼に米つきよみの神なればま〻になるのもきねがならはし

むさしの國目黒大鳥明神にて　四方赤良

此神にぬさをも鳥の名にしおはゞさぞ大きなるかごありぬべし

むさしの國三田といふ里の三笠山といへる社に

まうで侍りて欄干によりて海邊を眺望し侍りしに社僧の心ありてたばこ盆を出し侍りしかば　から衣橘洲

たばこ盆出してかすがの宮柱ふとまゐりしもえんのはしる歟

村社笛太鼓

笛たいこはやしの中の神祭とつぱ日よりをいのる一むら　卯雲

競馬

埒もない見物事に引きかへて競馬は何もかものりゝしさ　くさやのもろあぢ

今はとて汗をみたらし加茂の宮あぶみあやぶみのりくらべ馬

神主遁世　から衣橘洲

神主も世を中臣のはらひすて今はあたまのかみとゞまらず

むさしの國江戸麻布しら山といへるに稲荷の宮

居あり神木とて大きなる木のあるにあらしはげ
しき夜いかなるもののしたるにやあらん白き紙
に人の目を書きてそれがたゞ中へ大きなる釘を
うちいれたり見るにおそろしさむねもとゞろき
てかゝるさかしらしきわざをして人をのろふこ
とのあさましさよとてかの釘をとりすつる時み
やつこのよめる　小鍋のみさうづ
目を書きてのろはゞはなの穴二つみゝでなければきくこともなし
とかきてかの木におしはりておきけるに又の夜
れいのものの來りてみけるにやまた耳をかきて
釘をうちけるにこたびもまたとりすてしと聞き
て　ちゑのないし
めをみゝにかへすゞ〳〵もうつ釘のつんぼうほども猶きかぬなり
かく書きてまたはりけるにいかにしふねきのろ
ひ人なりとも思ひよわりなんとおもふにそれよ
り三日四日も過ぎし頃わらをもて人のかたちを
つくりつゝれいの釘あまた所にうちてやしろの
まへにたておきけるを見侍りて　もとの木あみ
いなり山きかぬいのりにうつ釘もぬかにゆかりのわらの人がた
かゝることたびごとにきゝけるゆゑにやそのの
ちはせざりけるとなん　紀定丸
福神里通
人目をばいつも頭巾にかくれ里數のこがねをまかきやらの神
大黒　地口有武

大黒のをしへを守る人ならばつちもたからも手のうちにあり　星定つぐ

福祿壽

福祿壽みとせがうちに南極の星を守らば長者なるらん　星直つぐ

題しらず

心をばまことの道にいれおきていのらば猶も神や守らん　大經師文しろ

惠比壽

神の德いはゞなにたゞ西のみや東に南まうで北々　長つぐ

いのりてはさらに晝夜もわかゑびす千たびもゝたびあきなひの神　かね女

和歌三神

住吉と明石と和歌の浦波に願をかけてみつの御神　い女

玉つしまみがく人丸住吉の名もおもしろき和歌の三神